「日本の恋愛・結婚に関する全国意識調査（2019）」報告書

株式会社エウレカ

監修：中央大学文学部 山田晶弘 教授

pairs

調査目的

社会環境の変化と相まって、当事者の意識がこれまでとは変化していることから、そうした支援が必ずしも独身者が交際・結婚に踏み出すことに結び付いてはいない。
日本における恋活・婚活マッチングアプリのリーディングカンパニーであるエウレカは、「かけがえのないパートナーとの出会いを生み出す」ことをビジョンに掲げ、これまで独身者同士の出会いの場を提供し、また、実際に恋愛関係、パートナーシップ、婚姻に至るカップルを生み出してきた。このような成果を単なるビジネスの事業としてのみに留めず、日本の重要な社会課題の解決に役立てることができないかとの問題意識から、恋愛・結婚に関するさまざまな状況について社会に発信をし、より多くの方による議論に貢献したいと考えている。
本調査「日本の恋愛・結婚に関する全国意識調査」は、独身者の結婚や交際に関する意識と実態を把握することによって、近年、交際・結婚に消極的な人々が増えている社会環境や当事者の心理状況を探り、そして民間における恋愛・結婚の促進に寄与できる有効手段の特定などについて考察するために行われた。

調査主体

株式会社エウレカ

調査監修

中央大学文学部　山田昌弘教授

調査内容

本調査は、20 代～60 代の既婚・独身の男女を対象とし、 以下の内容から構成されている。

（1）WEB アンケート調査
（2）インタビュー調査

WEB アンケート調査概要

1. 調査対象とサンプル構成

調査対象者は全国における成人の既婚者および独身者男女個人。
集計の際に、実際の人口構成に合わせるために、2015 年の国勢調査を用いて※性・年代・独身（含む離別・死別）・既婚別の人口構成をもとにウェイトバックを行った。サンプル構成は以下の通り。

男性独身者（離別・死別含む）	20-29歳	30-39歳	40-49歳	50-99歳	全体
回収数	350	350	350	200	1250
ウェイトバック後サンプル構成	361.8	247.6	198.7	441.8	1250
女性独身者（離別・死別含む）	20-29歳	30-39歳	40-49歳	50-99歳	全体
回収数	350	350	350	200	1250
ウェイトバック後サンプル構成	283.9	170.6	132.4	663.2	1250

男性既婚者	20-29歳	30-39歳	40-49歳	50-59歳	60-99歳	全体
回収数	250	250	250	250	250	1250
ウェイトバック後サンプル構成	5.9	103.5	224.4	225.7	690.5	1250
女性既婚者	20-29歳	30-39歳	40-49歳	50-59歳	60-99歳	全体
回収数	250	250	250	250	250	1250
ウェイトバック後サンプル構成	9.5	128.7	247.0	239.5	625.3	1250

※ 2015 年の国勢調査を利用するにあたり、当時の年代を調査時点の年代にみなして集計している。また、独身者既婚者比率については、2015 年時点のもので代替している。補正後サンプルについては、四捨五入して小数第一位までの表示としたため、回収数の合計と誤差が生じている。

2. 調査期間

2019 年 10 月 21 日（月）～10 月 23 日（水）

3. 調査方法

リサーチパネル 登録者への web によるアンケート調査

4. 主な調査内容

（1）既婚者調査

① 結婚に至る経緯

知り合ったきっかけ、相手探しの活動、結婚相手を選ぶ際に重視する点、結婚に際して引け目に感じたこと　など

② 結婚生活に対する意識

結婚生活満足度、結婚後の仕事・家事・育児などの役割分担　など

③ マッチングアプリに対する意識

利用状況、サービス選定で重視する点、使用評価　など

（2）独身者調査

① 異性との交際に関する意識と実態

交際の有無、交際意向とその理由、相手を選ぶ際に重視する点、交際に際して引け目に感じたこと　など

② 結婚に関する意識と実態

結婚意向とその理由、結婚相手を選ぶ際に重視する点、結婚に際して引け目に感じたこと、結婚後の仕事・家事・育児などの役割分担　など

③ マッチングアプリに対する意識

利用状況、今後の利用意向、サービス選定で重視する点、不安や不満　など

インタビュー調査概要

1．調査目的

独身者の、交際、結婚についての意識を深掘りし、特に当事者が交際・結婚を消極的に捉える理由を突き止める

2．調査対象と件数

- 調査１
  - 交際相手がおらず、交際相手を欲しいと思っている首都圏在住の 26-34 歳の独身男女６名
  - 恋活・婚活マッチングアプリ利用について拒否者でない（「絶対に利用しない」回答者でない）

	男性	女性
24-29歳	3	3
30-34歳	3	3

- 調査２
  - 交際相手がおらず、交際相手を欲しいと思っていない首都圏在住の男女３名（31 歳女性、28 歳男性、30 歳男性）

3．調査期間

- 調査１：2020 年 4 月 11 日（土）～16 日（水）
- 調査２：2020 年 7 月 13 日（月）～15 日（水）

4．調査方法

- 調査１、２ともにオンラインデプスインタビュー

5．主な調査内容

- 調査１、２ともに：恋愛についての価値観の理解、実際の恋愛体験・状況の理解、婚活・恋活マッチングアプリへの印象評価など

調査結果の要点

1. 独身者が交際をしたくない、または交際相手を見つける活動をしていない理由の多くに「面倒」「疲れる」などが挙げられる。当事者が交際を消極的に捉えるのは、交際に関するリスクやコストパフォーマンスを強く意識していることが大きな原因である。

2. 「いずれは結婚したい」独身者が結婚を考えた時に、何らかに引け目を感じる割合が、既婚者が独身当時に引け目を感じていた割合より２倍高いことから、こうした引け目が結婚を躊躇させる一因となっていることがうかがえる。そして独身者が引け目に感じる要素と、既婚者が実際重視した条件に違いがあり、相手から求められるものよりもむしろ、自分自身に対して求めていることが独身者の交際状況や婚活に影響している。

3. 独身女性が自らの年収に関係なく結婚相手の年収を高く望む傾向がある。また、結婚後の家事や育児の分担に対する独身男性の希望と既婚男性の実態に差があり、結婚後の仕事に対する独身女性の希望と既婚女性の実態にも差がある。社会における男女の役割や経済力のバランスが変化しているにもかかわらず、従来の価値観に基づいた夫婦や家庭のあり方が続いており、男女ともに独身者と既婚者の希望と実態にギャップが生じている。

4. マッチングアプリを通して交際相手を見つける活動をしている、あるいは結婚した人は一定数おり、結婚に対する満足度の最も高い既婚者の中での出会いは、マッチングアプリによって知り合った夫婦というのが一番多い。

調査結果の要点詳細

1. 交際に関する「面倒」の考え方の裏にあるリスクやコストパフォーマンスへの意識

独身者が交際をしたくない、または交際相手を見つける活動をしていない理由の多くに「面倒」「疲れる」などが挙げられる。当事者が交際を消極的に捉えるのは、交際に関するリスクやコストパフォーマンスを強く意識していることが大きな原因である。

＜背景と前提＞

18 歳～34 歳未婚男女における、恋人・婚約者がいる割合が、2005 年から 2015 年の間に、男性では 5.9 ポイント（27.2％から 21.3％に）、女性では 6.5 ポイント（36.7％から 30.2％に）それぞれ減少している[1]。また、日本、韓国、アメリカ、フランス、スウェーデンの 5 カ国で比較したところ、2010 年における婚約者または恋人がいる人の割合は日本が最も低く、2005 年から 2010 年の間に、恋人または婚約者がいる 20～49 歳の男女の割合について、アメリカ、フランス、スウェーデンでは増加しているが、日本と韓国では減少し、日本の減少率は韓国の 2 倍以上だった[2]。

いわゆる「恋愛離れ」が進む中、本調査はあらためて独身男女の交際実態を調べ、その実態の裏にある当事者の心理状況、特に交際を消極的に捉える当事者の考え方を探った。

---

[1] 国立社会保障・人口問題研究所の「第 15 回出生動向基本調査」http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/doukou15_gaiyo.asp

[2] 平成 25 年「厚生労働白書」https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/13/dl/1-02-2.pdf

1 - 1 .web アンケート調査の結果

① 現在交際相手がいる男性は 17.4%、女性は 21.8%

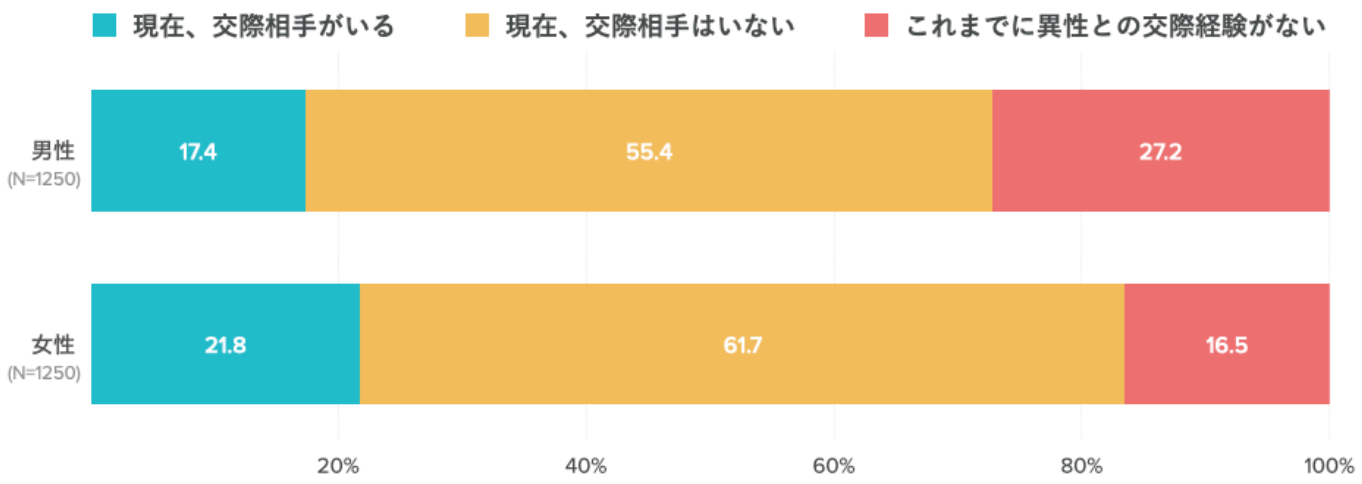


図1. 現在の異性との交際状況

独身者の現在の異性との交際状況をみると、男性では、「交際相手がいる」（17.4%）は 1 割台で、交際相手が“いない”（82.6%）という人が 8 割を超えている。女性では、「現在、交際相手がいる」（21.8%）は 2 割台となっている。

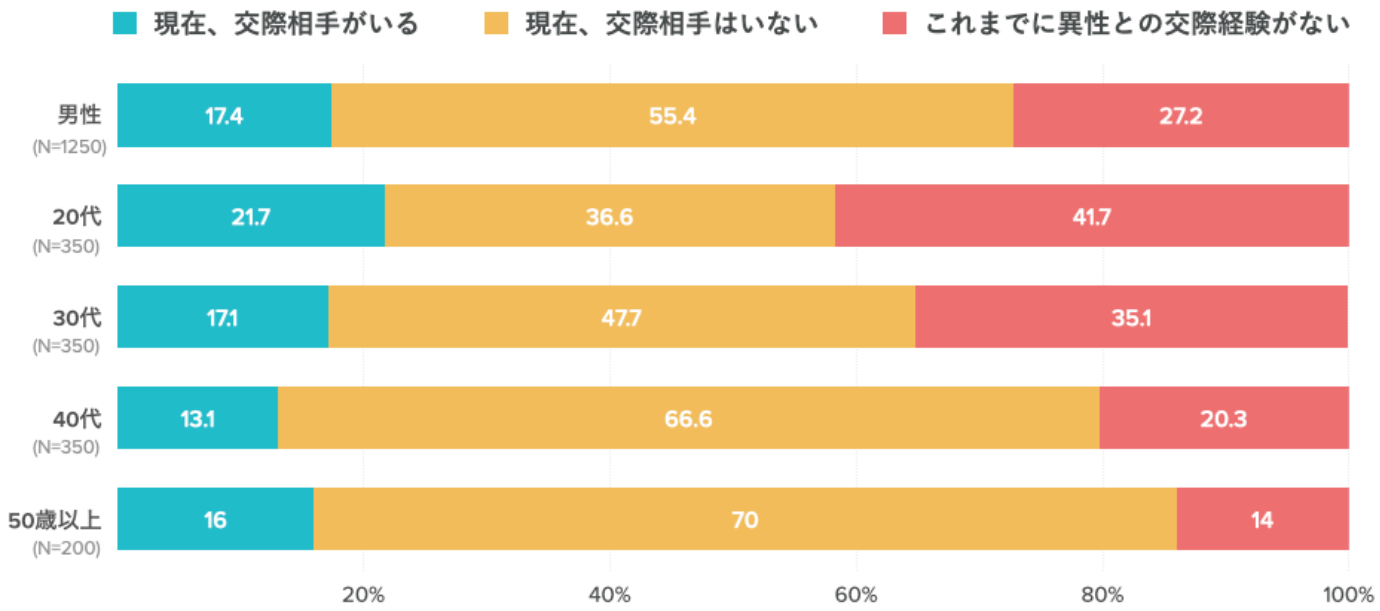


図2. 現在の異性との交際状況（男性）

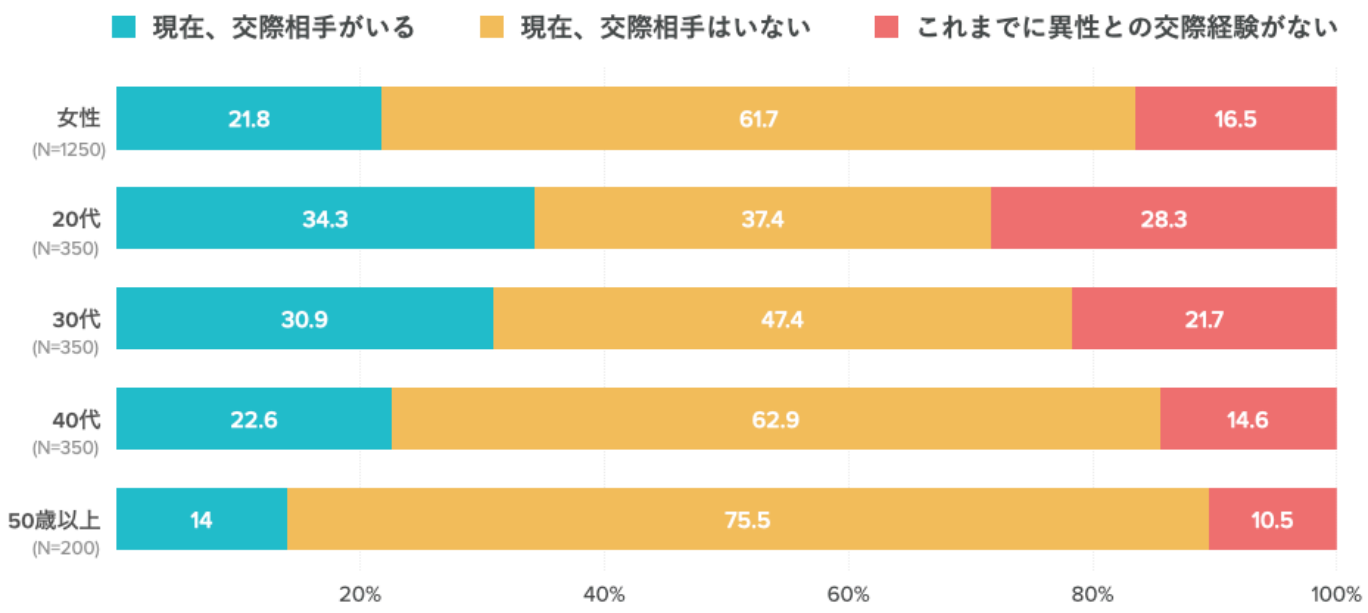


図3. 現在の異性との交際状況（女性）

年代別に見ると、男性では、「現在、交際相手がいる」という割合は、20 代（21.7%）、30 代（17.1%）、40 代（13.1%）となっている。女性では、20 代（34.3%）、30 代（30.9%）、40 代（22.6%）となっており、年代差は男性よりも大きなものとなっている。

② 異性と「交際したいと思う」割合は、男性（58.1%）、女性（30.6%）

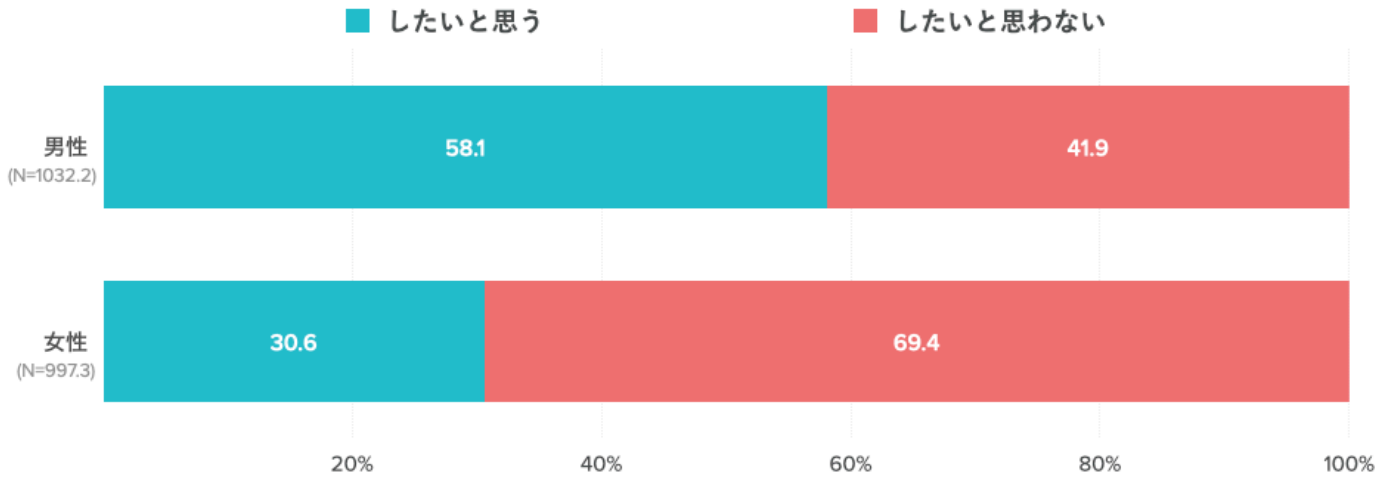
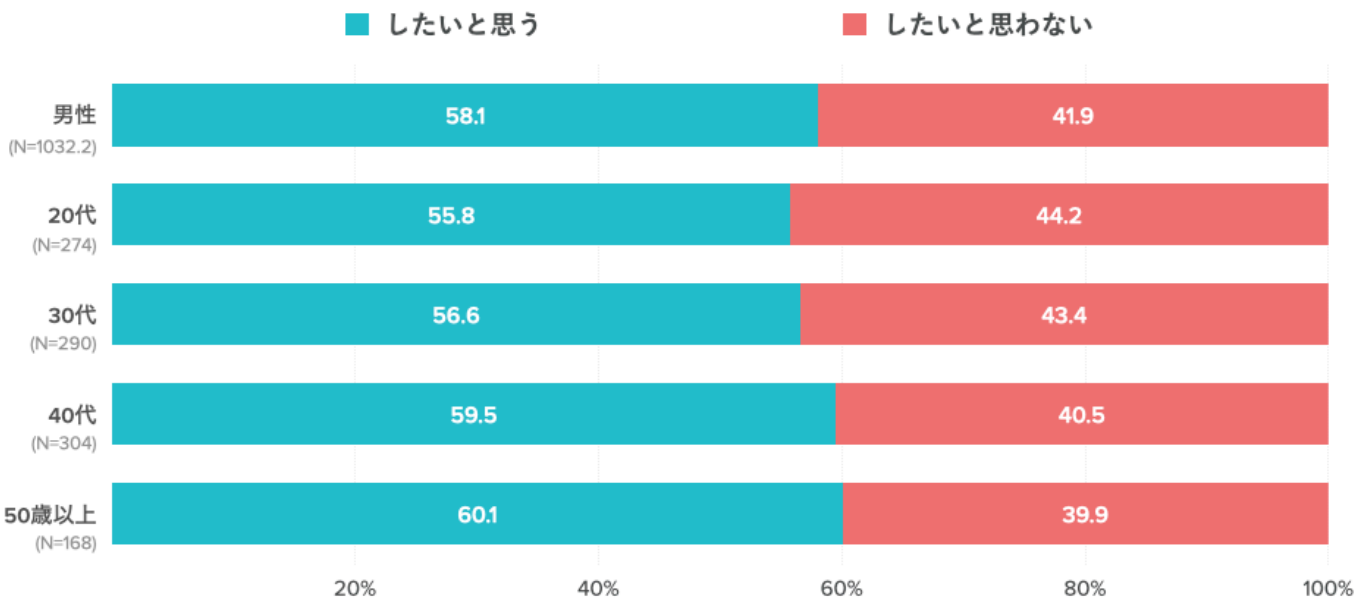


図4.異性と交際したいと思うか

「現在、交際相手はいない」「これまでに、異性との交際経験がない」という人を対象に、異性と交際したいと思うかどうかをみると、男性では、「したいと思う」（58.1%）が半数を超え、「したいと思わない」（41.9%）よりも多くなっているが、女性では、逆に「したいと思う」（30.6%）よりも「したいと思わない」（69.4%）の方が多くなっている。交際願望は男性の方がかなり強い。



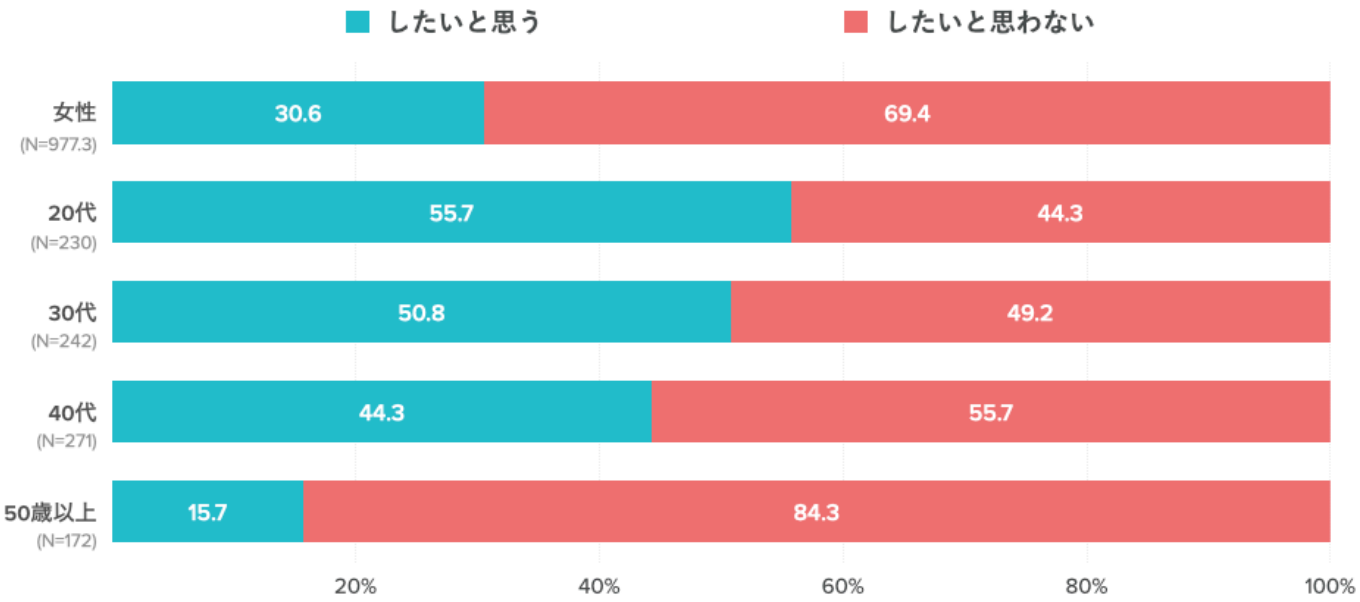


図5. 異性と交際したいと思うか（年代別）（男性（上）、女性（下））

年代別に見ると、男性は年代が上がるほど「したいと思う」が多い傾向が若干あるが、あまり大きな差ではないのに対し、女性は年代が上がるほど「したいと思う」割合は減っており、20 代（55.7%）、30 代（50.8%）では 5 割台だが、40 代（44.3%）では 4 割台、50 歳以上（15.7%）になると 1 割台まで下がっている。

③ 交際したいと思う人の中、交際相手をみつける活動をしていない男性が 87.9%、女性が 85.4%

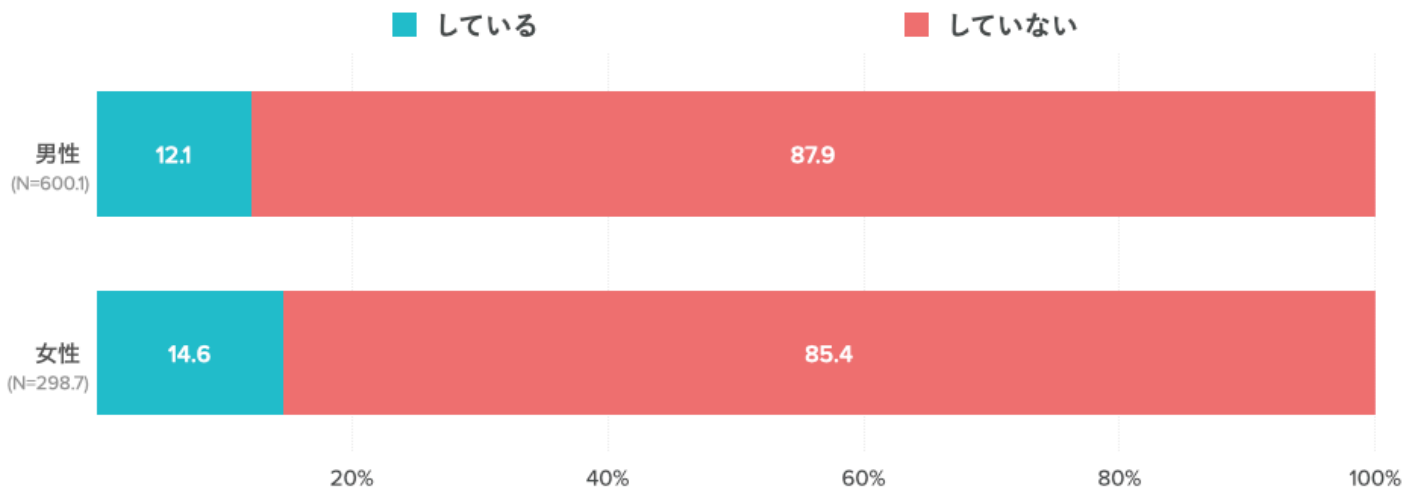
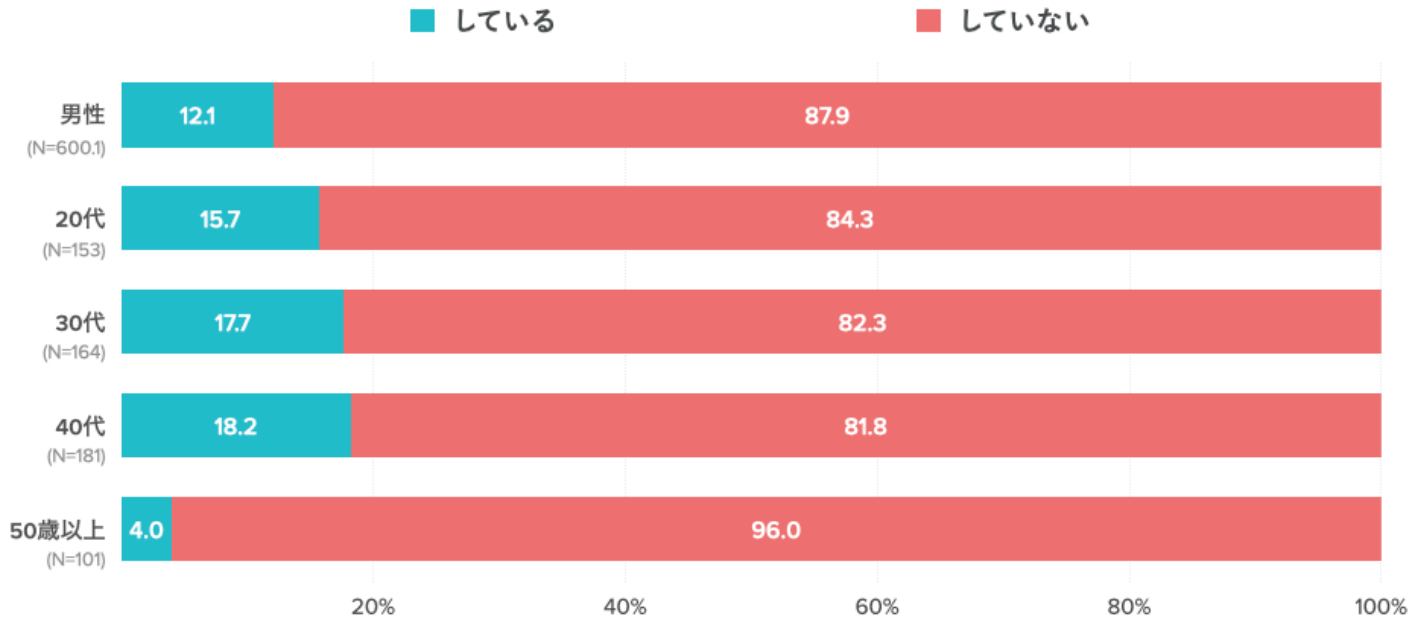


図6. 現在交際相手を見つける活動をしているか

「異性と交際したいと思う」人に、交際相手をみつける活動をしているかどうかを聞いたところ、男性では「している」は 12.1%、女性が 14.6%で、ともに 1 割台にとどまっており、交際相手をみつける活動をしていない男性が 87.9%、女性が 85.4%を占める。



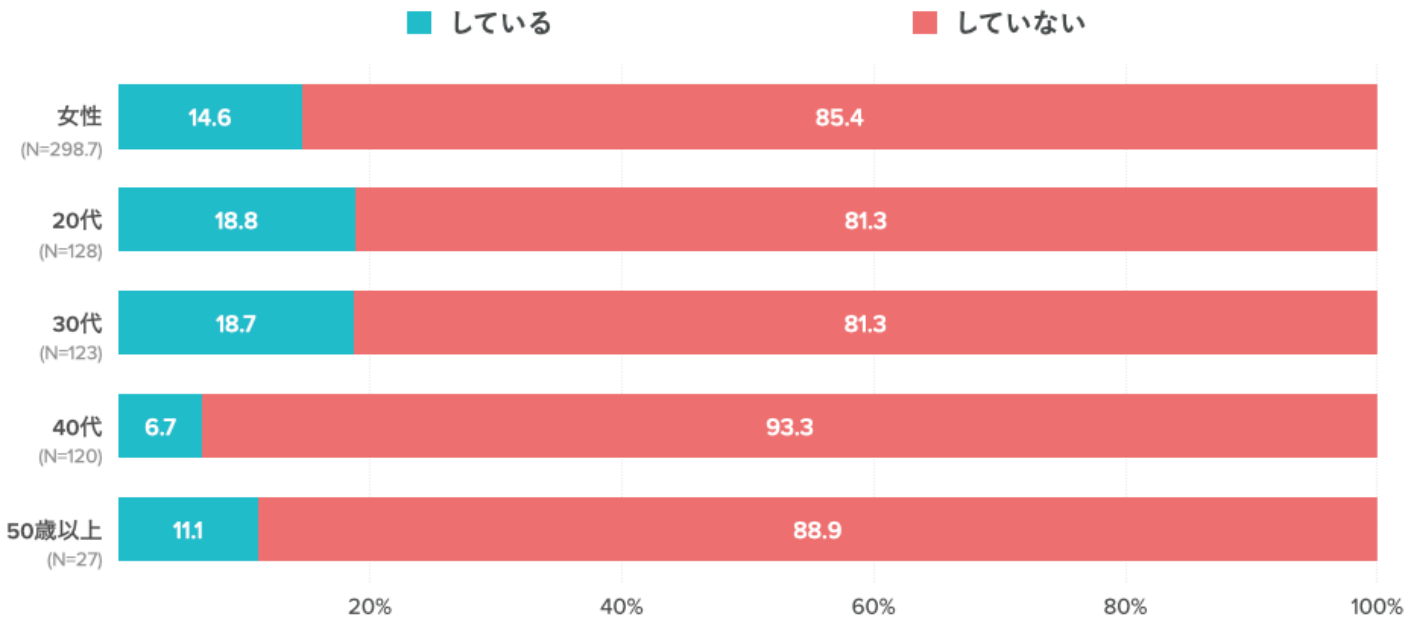


図7. 現在交際相手を見つける活動をしているか（年代別）（男性（上）、女性（下））

年代別に見ると、「している」割合は、男性では、20 代（15.7%）、30 代（17.7%）、40 代（18.2%）となっており、女性では、20 代（18.8%）、30 代（18.7%）、40 代（6.7%）となっている。

④「交際したいと思わない」主な理由は、「交際は面倒だから」（男性 28.9%、女性 33.6%）、「疲れるから」（同 27.2%、19.8%）、「恋愛が面倒だから」（同 25.2%、23.7%）など

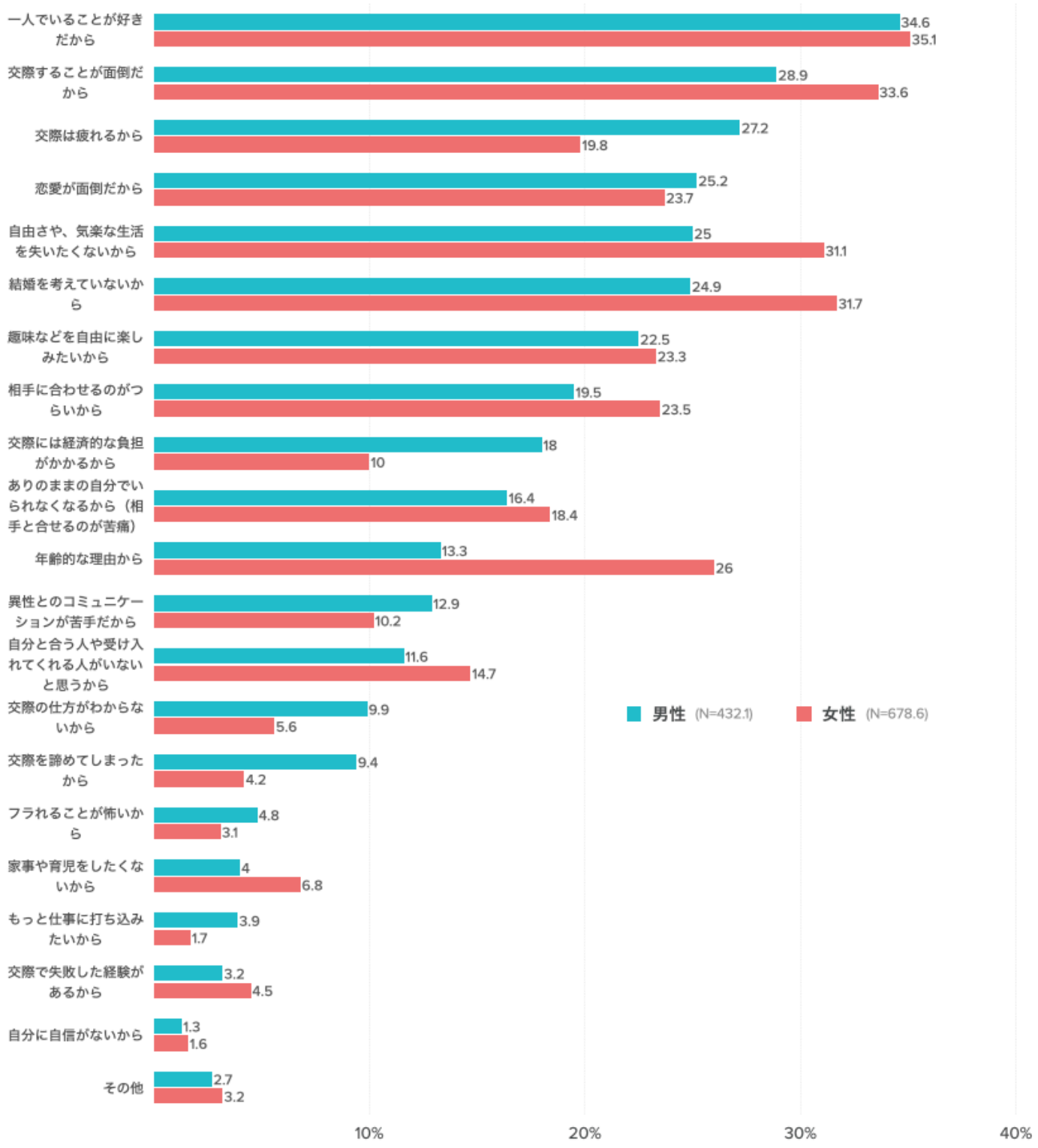


図8. 異性と交際したいと思わない理由（複数回答）

異性と交際をしたいと思わない理由をみると、まず男性では、「一人でいることが好きだから」（34.6％）、「交際することが面倒だから」（28.9％）、「交際は疲れるから」（27.2％）、「恋愛が面倒だから」（25.2％）、「自由さや、気楽な生活を失いたくないから」（25.0％）、「結婚を考えていないから」（24.9％）などの順となっている。
女性では、「一人でいることが好きだから」（35.1％）が最も多く、以下「交際することが面倒だから」（33.6％）、「結婚を考えていないから」（31.7％）、「自由さや、気楽な生活を失いたくないから」（31.1％）、「年齢的な理由から」（26.0％）、「恋愛が面倒だから」（23.7％）、「相手に合わせるのがつらいから」（23.5％）、「趣味などを自由に楽しみたいから」（23.3％）、「交際は疲れるから」（19.8％）などの順で、男女ともに「面倒だから」、「疲れるから」といった消極的な理由から交際をしたいと思わない者が多い。

⑤「交際相手をみつける活動をしていない」理由としては、「経済的な理由から」（男性 30.0%、女性 12.8%）、「活動するのが面倒だから」（同 25.1%、31.6%）、「どう活動したらいいかわからないから」（同 19.5%、女性 32.3%）、など

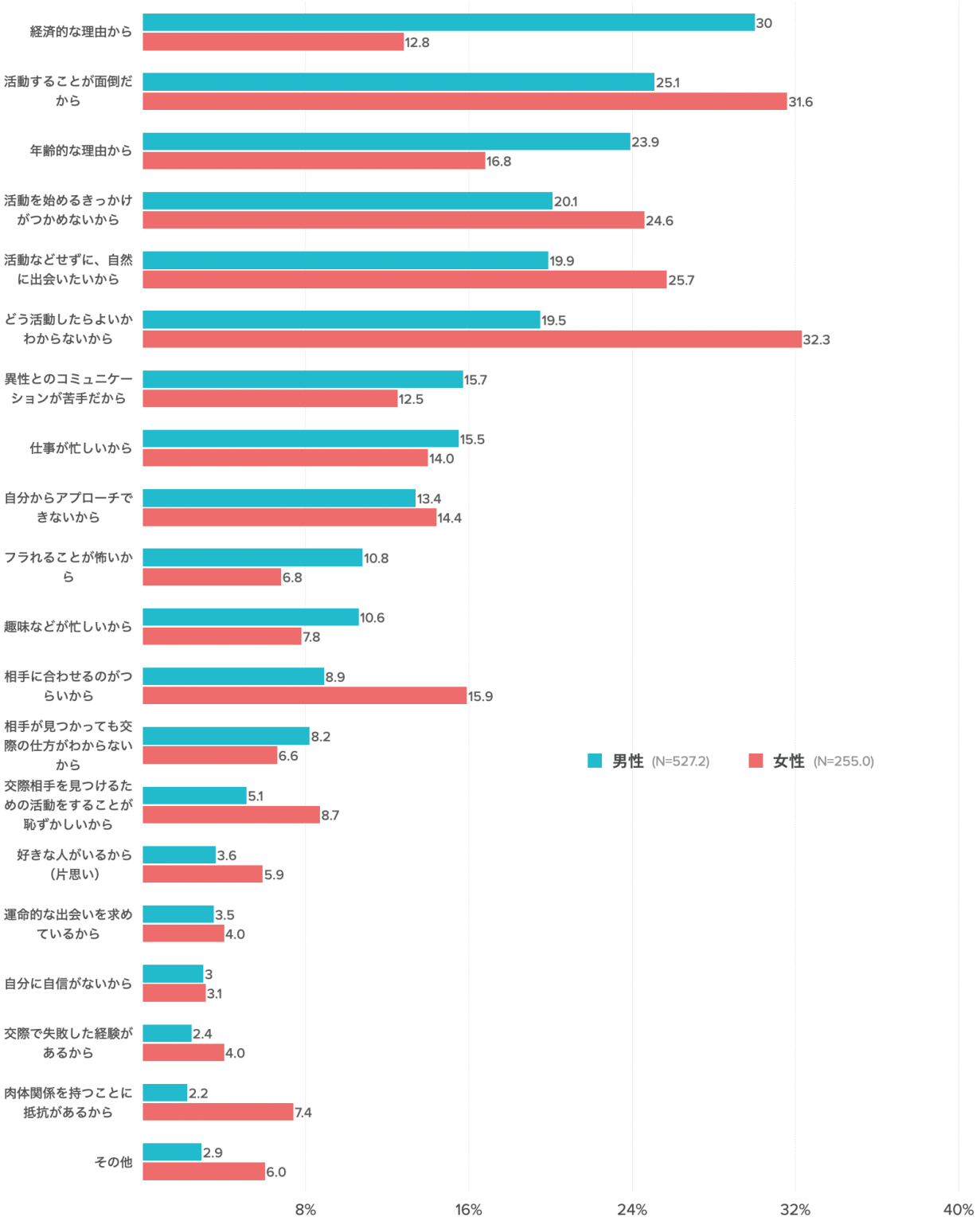


図9. 交際相手を見つけるための活動をしていない理由（複数回答）

「交際相手がいない」人で交際相手を見つけるための活動をしていない理由をみると、まず男性では、「経済的な理由から」（30.0％）、「活動することが面倒だから」（25.1％）、「年齢的な理由から」（23.9％）、「活動を始めるきっかけがつかめないから」（20.1％）、「活動などせずに、自然に出会いたいから」（19.9％）などの順となっている。
女性では、「どう活動したらよいかわからないから」（32.3％）が最も多く、以下「活動することが面倒だから」（31.6％）、「活動などせずに、自然に出会いたいから」（25.7％）、「活動を始めるきっかけがつかめないから」（24.6％）などが続いている。

1-2.インタビュー調査の結果

現在交際相手がいないかつ交際したくないと思う男女に対して、恋愛に対する考え方や、交際したくないや活動していない理由を尋ねたところ、以下の回答がありました：

> 僕には女性不信な傾向があるんだと思う。そもそも女性がそこまで好きじゃないみたいな。（中略）僕の場合は姉貴がいて、姉貴があまりいいようには見えない。それが原因とは一概に言えないが、姉貴が一番身近にいた女性だったので、別に女性に対して興味というのは薄れていった。
> （30 歳男性、現場監督）

> 自分が相手のことを好きだけど、相手が自分のことが好きかどうかがわからないとか、付き合った後も好きでいてくれるのか、そういうところが不安になる。そうすると、恋愛に向いていないなという気が今はする。
> （26 歳女性、人事）

また、現在交際相手がほしいが交際相手をみつける活動をしていない男女に対して、恋愛に対する考え方や、交際したくないや活動していない理由を尋ねたところ、以下の声が上がりました：

> 恋愛を考えたいんだけど、仕事のことも頭の中にある。今後、どうやって出会いをしたら良いんだろうという悩みがあると、たぶん、仕事に逃げているんだと思う。
> （35 歳女性、保育士）

恋愛したいけど、どうすれば良いのかというと変なんだけど。あんまり自分に今まで成功例というのもそんなにないので。例えば、外見を磨けば上手くいくのかとか。マメに連絡を取ったら上手くいくのかとか、そういうわけでもないので。恋愛する相手によって、相手との距離感をつかむのも難しい。
（36 歳女性、営業事務）

自分自身に自信を持てていないので相手に自分がどう見えているのかを常に思っていそう。一緒にいて自分は楽しくても相手が楽しいかが不安になる。
（32 歳男性、事務）

恋愛は疲れちゃう。あんまり自分の心がざわざわしたりとか、感情を揺さぶられたりするのが嫌なんだよね。すべてがプラスだったら良いんだけど、うまくいかないことがあったりすると、引きずってしまうタイプなので、切り替えができないのではないかと思っているので。（中略）恋愛がのっているときは仕事ものるけど、それが 1 つダメになると全てがダメになる場合もある。
（36 歳女性、営業事務）

彼氏はいたほうが、もっと人生楽しくなると思うし、年齢的にも結婚のことを考えたら絶対いたほうが良いと思う。ただ、無理に彼氏を作ろうと思って、毎日男性のことを品定めでもないけど、そういう感じで接するのも好きではない。彼氏を作る目的達成のために出会いの場に頑張って行くのも、そこまでやる気が出ないと言うとおかしいけど、そこに情熱を注げなくて。出会いの場とかにもちょいちょい顔は出すけど、普通に生きていていい人に出会えて付き合えれば良いかなというスタンス。
（28 歳女性、事務）

今まで恋愛の話とか、身の回りで起こった話は家で姉とよくしていたが、姉が家を出ていったので、同年代の人が他にいなくなった。友達とかに話をすることもあるけど気軽ではないので。アプリ配信だと、自分一人で始めようと思って始めたらそこにリスナーの人が来てくれるので。別に連絡とかを取らずとも自分の話を聞いてくれる人が出てくるというのがあって、それでアプリ配信を始めた。
（24 歳男性、事務）

コメント

交際相手探しや異性との交際を若者が「面倒」「疲れる」と捉えているのは、交際相手探しや異性との交際に多くの精神的・金銭的・時間的負担がかかる一方、払った努力に対して結果が期待通りにいかない可能性があることに対して、「男女の恋愛はリスクがあり、コストパフォーマンスが悪い」という意識を持っているのでは。

上記の男女関係における「うまくいかない」可能性は時代に関わらず必ず存在し、また人間は基本的に周りとつながるニーズを持つと思われるが、なぜ今になって交際相手探しや異性との交際を躊躇させる理由になったかというと、近年では、人と人のつながり方はソーシャルメディアやゲーム、さらに男女の接客業などと多様化しており、またそれらの「つながり方」は不特定な人を相手にするため「つながれなくなる」可能性が低いことから、「やりごたえ」が高く、うまくいくか保証がない個人との関係に時間・お金を費やすことがリスクであり、コスパが低いように見えてしまっていることが原因の一つなのでは。

さらに、ソーシャルメディアなどネットでの「つながり」に活動の軸足を置くと、見栄えが重要視されるようになり、出会いを欲しがることが「かっこ悪い」とまわりに捉えられる、またそれが原因で自分もそのように捉えるようになると、素直に言えない、行動に出せない人が増えるのでは。現代の若者の心理状況を鑑みて、出会いとともに「学び」や「楽しみ」を得ることへのニーズは「出会いの場」や「出会いのきっかけ」を提供するプラットフォームやイベントにおいては高そうである。

また、男女の違いも興味深い。やはり、伝統的なジェンダー意識がさまざまな所で残っていることが見え隠れする。結婚＝出産とセットとなっているので、男女とも年齢が高くなると交際意欲も低下する。ただ、その落ち方は、女性の方が大きいように見える。未だ、男性の魅力、経済力、積極的、女性の魅力、年齢、控えめであることという伝統的ジェンダー観が影響しているようである。男性は経済力がないと自信がなくなる。一方、女性は受け身であるから「交際を始める仕方が分からない」という回答が増えるのではないか。

調査監修：中央大学 山田昌弘教授

2.「いずれは結婚したい」独身者が婚活において引け目に感じる要素と、既婚者が重視した条件の差について

「いずれは結婚したい」独身者が結婚を考えた時に、何らかに引け目を感じる割合が、既婚者が独身当時に引け目を感じていた割合より２倍高いことから、こうした引け目が結婚を躊躇させる一因となっていることがうかがえる。そして独身者が引け目に感じる要素と、既婚者が実際重視した条件に違いがあり、相手から求められるものよりもむしろ、自分自身に対して求めていることが独身者の交際状況や婚活に影響している。

2-1.web アンケート調査の結果

①独身者では、男女ともに「結婚を考えた時に引け目を感じたものは特にない」が約２割にとどまるが、既婚者では半数を占める（図 10）。

②23.4%の独身女性が「年齢」を引け目と感じたが(図 10 左)、結婚相手を選ぶ際に「年齢」を重視した既婚者男性は 10.3%と少ない（図 11）。また、25.4%の独身男性が「年齢」を引け目と感じたが(図 10 左)、結婚相手を選ぶ際に「年齢」を重視した既婚者女性は 13.6%である（図 12）。

③26.3%の独身男性が「容姿（身長、体重、顔）」を引け目と感じたが（図 10 左）、結婚相手を選ぶ際に「容姿（身長、体重、顔）」を重視した既婚者女性は 12.1%である（図 12）。

④23.8%の独身女性が「料理の上手さ」を引け目と感じたが（図 10）、結婚相手を選ぶ際に「料理の上手さ」を重視した既婚者男性は 12.0%にとどまる（図 11）。

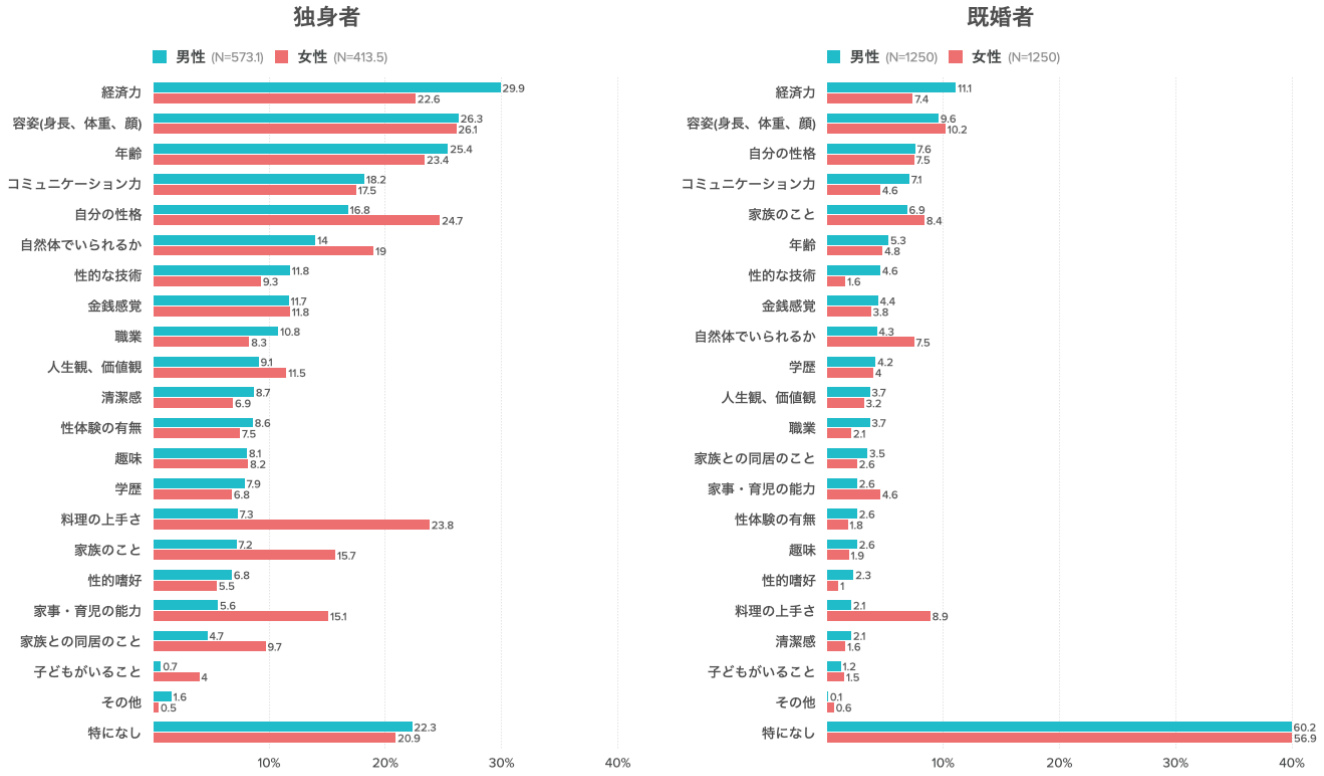


図10. 結婚を考えたときに引け目に感じるもの、感じたもの（複数回答）

独身者が異性との交際を考えたときに引け目を感じるもの（図 10 左）は、まず男性では、「特になし」という人は約 2 割（22.3%）で、残りの 8 割近く（77.7%）は何らかの引け目を感じるものをあげている。最も多いのは「経済力」（29.9%）で、以下「容姿（身長、体重、顔）」（26.3%）、「年齢」（25.4%）、「コミュニケーション力」（18.2%）、「自分の性格」（16.8%）などの順となっている。
女性では、「特になし」という人は 2 割（20.9%）で、“ある”（79.1%）の割合は男性（77.7%）よりもやや高い。最も多いのは「容姿（身長、体重、顔）」（26.1%）で、以下「自分の性格」（24.7%）、「料理の上手さ」（23.8%）、「年齢」（23.4%）、「経済力」（22.6%）。男性と比べて 2 割以上の項目が多い。
既婚者に聞いた結婚を考えたときに、引け目を感じたもの（図 10 右）は、男女とも「特になし」（男性 60.2%、女性 56.9%）は半数程度で、残りの半数程度は何らかの引け目を感じたものをあげている。具体的には、男性では「経済力」（11.1%）、「容姿（身長、体重、顔）」（9.6%）、「自分の性格」（7.6%）、「コミュニケーション力」（7.1%）、「家族のこと」（6.9%）などの順。
女性では「容姿（身長、体重、顔）」（10.2%）、「料理の上手さ」（8.9%）、「家族のこと」（8.4%）、「自分の性格」（7.5%）などの順となっている。全般的に男女間で大きな差はない。

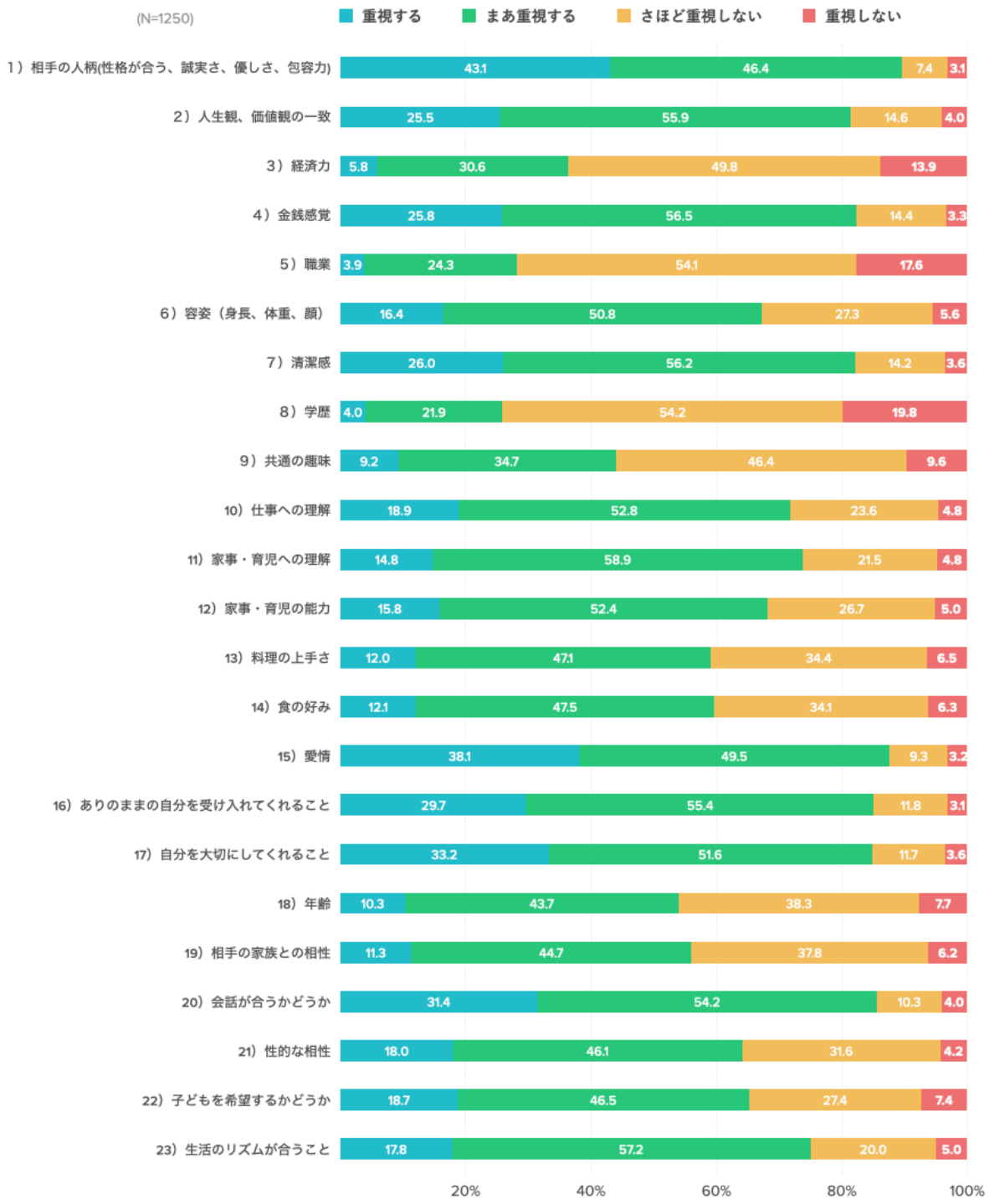


図11. 結婚相手を選ぶ際に重視した度合い（既婚男性）

結婚相手を選ぶ際に重視した度合いは既婚男性については、「重視する」の割合が高いのは、【１）相手の人柄（性格が合う、誠実さ、優しさ、包容力）】（43.1％）、【15）愛情】（38.1％）、【17）自分を大切にしてくれること】（33.2％）、【20）会話が合うかどうか】（31.4％）までの４項目が３割台を占めている。逆に最も低いのは【５）職業】（3.9％）で、以下【８）学歴】（4.0％）、【３）経済力】（5.8％）、【９）共通の趣味】（9.2％）、【18）年齢】（10.3％）などがある。

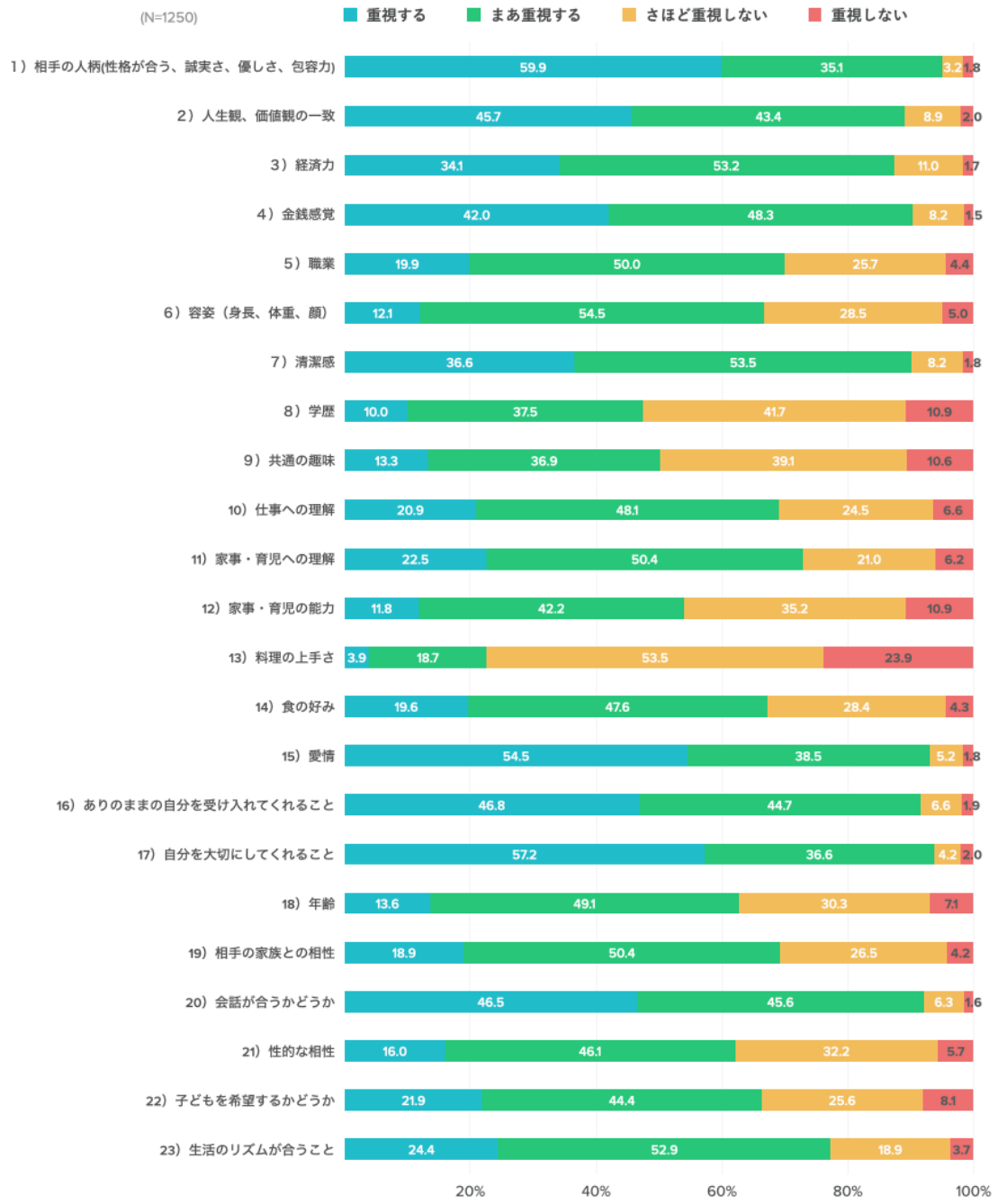


図12. 結婚相手を選ぶ際に重視した度合い（既婚女性）

女性については、トップは【１）相手の人柄（性格が合う、誠実さ、優しさ、包容力）】（59.9％）で男性と同じだが、以下【１）相手の人柄（性格が合う、誠実さ、優しさ、包容力）】（59.9％）、【17）自分を大切にしてくれること】（57.2％）、【15）愛情】（54.5％）、【16）ありのままの自分を受け入れてくれること】（46.8％）、【20）会話が合うかどうか】（46.5％）、【２）人生観、価値観の一致】（45.7％）、【４）金銭感覚】（42.0％）までの７項目が４割以上となっている。一方、最も低いのは【13）料理の上手さ】（3.9％）、【８）学歴】（10.0％）、【12）家事・育児の能力】（11.8％）、【６）容姿（身長、体重、顔）】（12.1％）などがある。

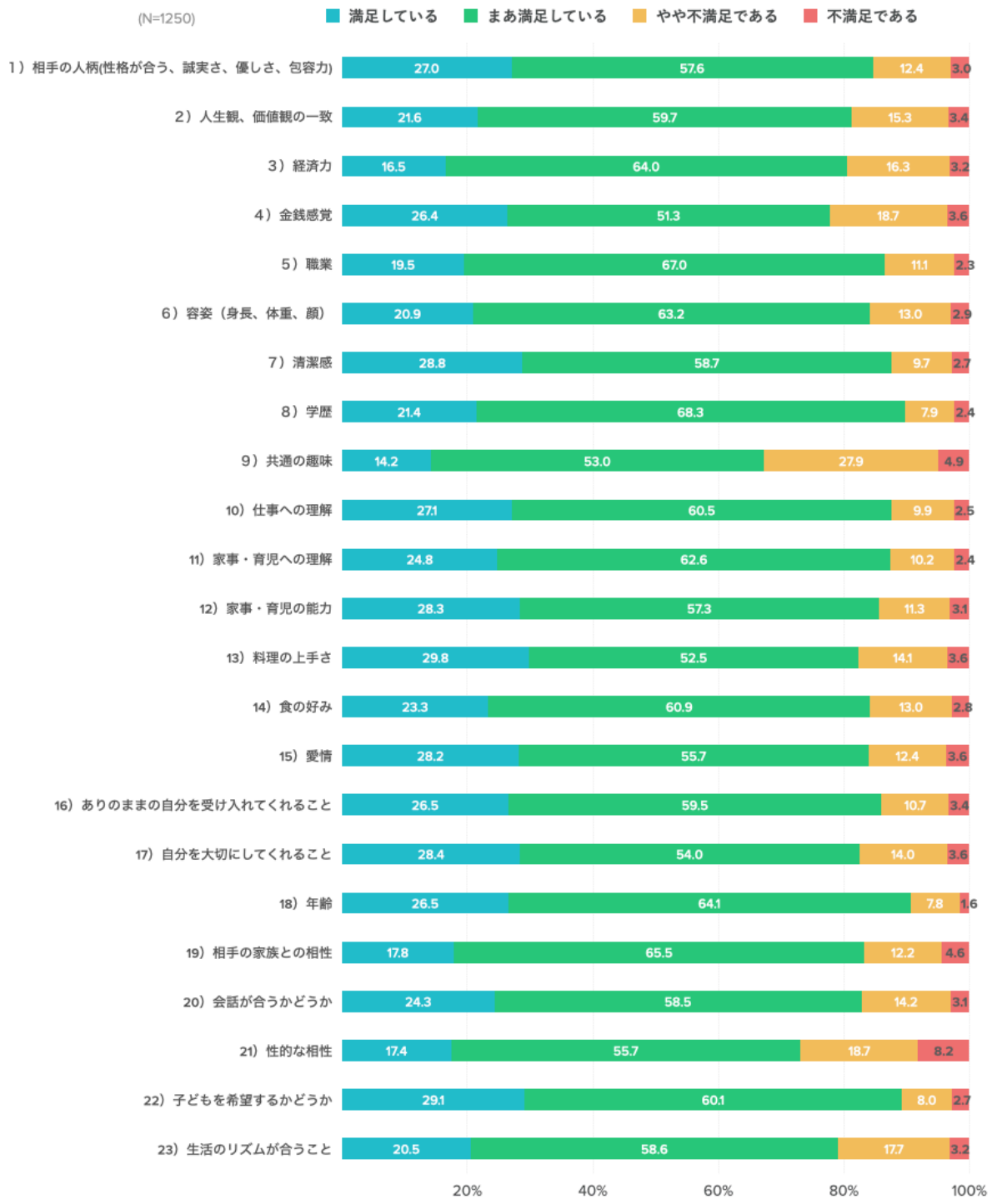


図13. 現在の結婚相手に対する満足度（既婚男性）

現在の結婚相手に対する満足度をみると男性では、「満足している」「まあ満足している」を合わせた“満足”の割合は、【18）年齢】（90.6％）、【８）学歴】（89.7％）、【22）子どもを希望するかどうか】（89.2％）、【10）仕事への理解】（87.6％）、【７）清潔感】（87.5％）などおおむね高くなっている。最も低い【９）共通の趣味】（67.2％）でも７割近い。

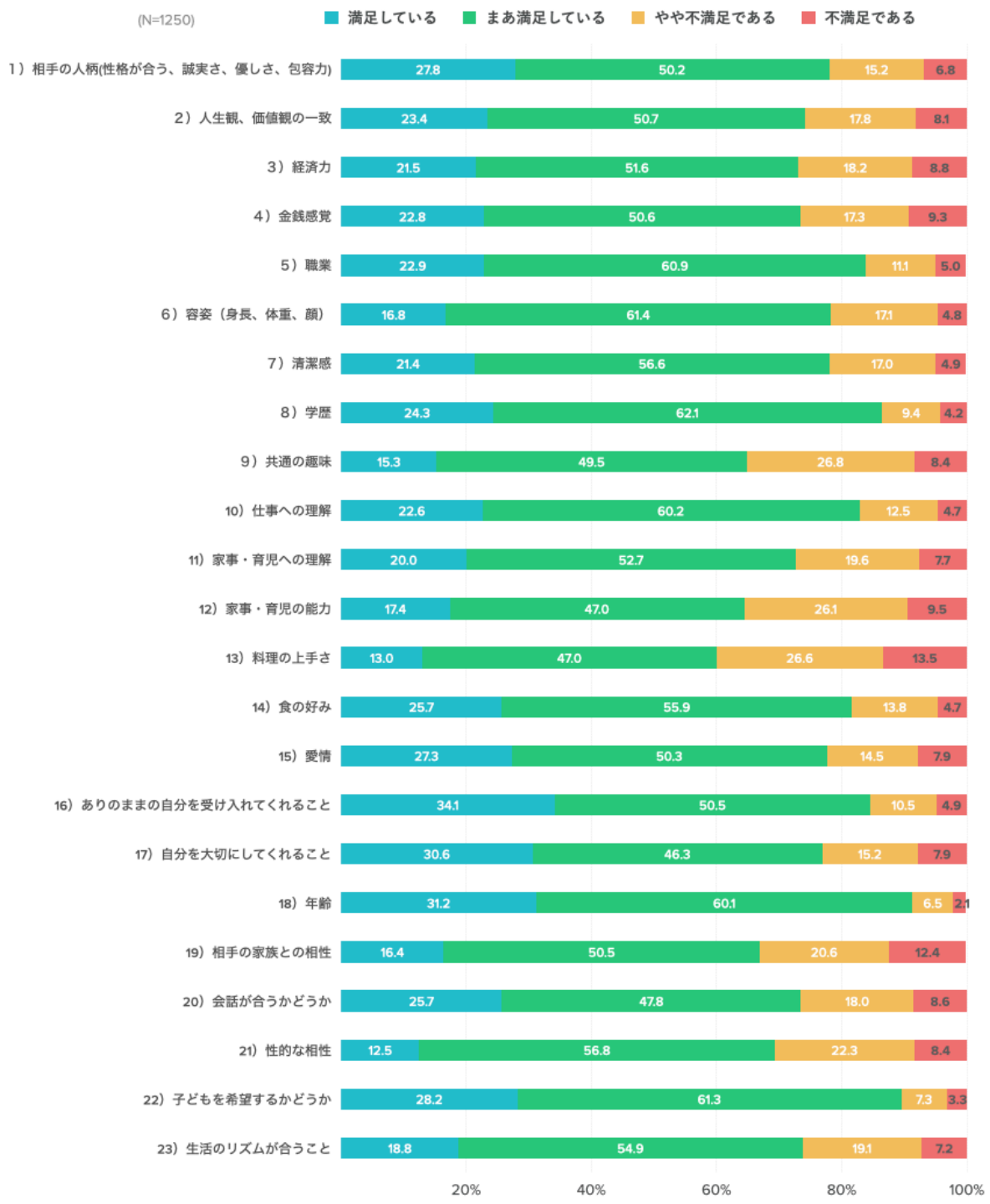


図14. 現在の結婚相手に対する満足度（既婚女性）

女性については、“満足”の割合は、【18）年齢】（91.4%）、【22）子どもを希望するかどうか】（89.4%）、【８）学歴】（86.4%）、【16）ありのままの自分を受け入れてくれること】（84.7%）、【５）職業】（83.9%）など、やはりおおむね高いが、男性と比べると総じて低めとなっている。

2-2.インタビュー調査の結果

いずれ結婚したいと思う独身者に対して、結婚に関する考え、相手を選ぶ際に重視すること、引け目に感じることについて尋ねたところ、以下の回答がありました：

結婚はもともとそんなにしたくなかったんだけど、けっこう周りの友達が結婚し始めるような年齢で、最近年も年なのでどうかなと思い始めている。あとは、僕は弟と妹は結婚しているので、自分の気持ちというよりも、母親とかが心配して、それに応えなきゃいけないのかなという気持ちが強い。だから、僕が自発的にしたいというよりは、周りからのプレッシャーというのか、世間の目というのかな。
（32 歳男性、予備校講師）

30 歳までには結婚したいなと思っているので、それを考えると、次の人なのかなと思っている。結婚を前提にと思うと、慎重に選んでしまう。今までだったら、学生時代は好きならすぐ付き合おうと思ったが、今だと、好きだと思ってからも、この人とあと 50～60 年一緒に過ごしていく、一緒に生活する姿を想像してしまう。考え方とかお金の感覚とかを吟味する。出会い方も、（中略）例えば、結婚するときに、「どこで出会ったの？」と聞かれて、「相席居酒屋で」だと恥ずかしいので親に言いにくい。
（25 歳男性、営業）

自分の身長が 168cm なので、たぶん女性の中では高身長のほう。小さい頃から大きかったので、ずっと大きいのがコンプレックスで、今もコンプレックス。なので、学生の頃とかは、やっぱり好きな人が 170cm ぐらいだとすると、ヒールを履くと自分のほうが高くなったりするので高いヒールが履けなかったりとか、ちょっと背中を丸めて歩いたりとかするような感じだったので、なかなかそういう人はいないと言えばいないんだけど、できれば 180cm ぐらいの人だったら、ヒールを履いても更に相手のほうが更に高いから嬉しいかなと。
（36 歳女性、営業事務）

コメント

精神的な充足を恋愛に求める一方で、「相手に断られてしまうかも」「相手は自分が期待していたような人ではないかも」「自分に合わない人かも」という不安などから「男女交際はリスクがある」と捉え、恋愛を避ける傾向になったのでは。

全体的に、結婚を考えた場合の、独身者が感じる引け目の有無と既婚者が感じた引け目の有無の度合いの違いや、「年齢」「料理の上手さ」などに対する独身者女性が引け目を感じる度合いと既婚者男性が重視した度合いの違い、そして「年齢」「容姿」などに対する独身者男性が引け目を感じる度合いと既婚者女性が重視した度合いの違いから、自らや相手の「ハード面」の条件に強いこだわりをもつことが独身者をためらわせる要因の一つでは。

年収や容姿などの「ハード面」の条件は相手に対するスクリーニングの入り口に過ぎず、結婚生活においては人柄、包容力、セックスの相性など「ソフト面」の要素が大事になっていく。

そして、やはりここでも、伝統的ジェンダー意識が見え隠れする。一般的な男性女性の魅力として語られることに、独身者はとらわれているのではないか。自分を選ぶ人が一人居ればよいわけで、たくさんの人に好かれる必要はない。結婚した人は、その点を分かっていて、引け目と考えずに相手を探したと考えられる。

調査監修：中央大学 山田昌弘教授

３．社会の変化に伴う男女の役割の変化と、従来と変わらない恋愛価値観の間に生じているギャップ

独身女性が自らの年収に関係なく結婚相手の年収を高く望む傾向がある。また、結婚後の家事や育児の分担に対する独身男性の希望と既婚男性の実態に差があり、結婚後の仕事に対する独身女性の希望と既婚女性の実態にも差がある。社会における男女の役割や経済力のバランスが変化しているにもかかわらず、従来の価値観に基づいた夫婦や家庭のあり方が続いており、男女ともに独身者と既婚者の希望と実態にギャップが生じている。

＜背景と前提＞

2019 年女性就業者数は 2992 万人と 前年に比べて 46 万人の増加と なり、２０１２年以降は右肩上がりである[3]。また、2019 年時点、男女間賃金格差（男＝100）は、74.3（前年 73.3）で、1.0 ポイントの縮小となっており、比較可能な 1976 年調査以降で過去最小となっている[4]。その一方、人口全体で見た場合、相対的貧困率[5]は上昇傾向にあり、より低い所得に置かれる人が増加している。また、代表的な格差指標であるジニ係数[6]で見た際に、若年層において格差が広がる傾向にある[7]ことがわかった。つまり、女性の社会進出が進んでおり、女性の社会地位と経済力が少しずつ高まってきているが、若年層男女ともにおいて経済格差が広がる状況である。

その中、家族を持つことや結婚の利点はどのように捉えられているか。国立社会保障・人口問題研究所「第 15 回出生動向基本調査」によると、結婚の利点として、18～34 歳の未婚者は、2000 年代以降、「精神的安らぎの場が得られる」と「愛情を感じている人と暮らせる」を挙げる男女とも減少傾向にあるのに対し、「経済的余裕が持てる」ことを挙げる男女とも増加がみられ、特に女性は 1987 年以降一貫して増加し、2015 年の調査では初めて 2 割を超えた。また、男女とも、結婚相手の条件として最も考慮・重視するのは「人柄」に次いで「家事・育児の能力」である[8]。それは、男女とも相手に経済力と家事・育児の分担を求めていることといえるであろう。

本調査では、上記の社会背景を念頭に置きつつ、独身者が結婚相手に求める収入と、結婚後の家事・育児・仕事における当事者の希望と実態と調べ、社会の変化に伴う男女の役割に求められる変化が当事者の価値観や実態にどの程度反映したかを探った。

---

[3] 総務省「令和元年　労働力調査年報」http://www.stat.go.jp/data/roudou/report/2019/pdf/summary1.pdf

[4] 厚生労働省「令和元年賃金構造基本統計調査」https://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/chingin/kouzou/z2019/dl/01.pdf

[5] 相対的貧困率とは、等価可処分所得（世帯の可処分所得を世帯人員の平方根で割って調整した所得）の中央値の半分に満たない世帯員の割合をいい、OECD の作成基準に基づいて算出している

[6] ジニ係数とは、所得の分布について、完全に平等に分配されている場合と比べて、どれだけ偏っているかを数値で表したもの

[7] 内閣府「選択する未来 －人口推計から見えてくる未来像－ －「選択する未来」委員会報告 解説・資料集－」https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/special/future/sentaku/s3_2_14.html

[8] 国立社会保障・人口問題研究所 「第 15 回出生動向基本調査」http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/NFS15_gaiyou.pdf

3 - 1 .web アンケート調査の結果

①年収に関する考察

結婚相手に望む年収をみると、女性は「400～600 万円」（35.0%）、「600～800 万円」（19.7%）、「200～400 万円」（18.8%）の順に多いが（図 15）、実際には「400 万円未満」の独身男性が 5 割以上を占めており（図 16）、女性の高望みの傾向がある。また、年収を 400 万円未満とそれ以上の別に見たグラフ（図 17．18）では、男性に比べ、女性は結婚相手に対して、自分の年収を上回る収入であることを望む傾向がみられた。

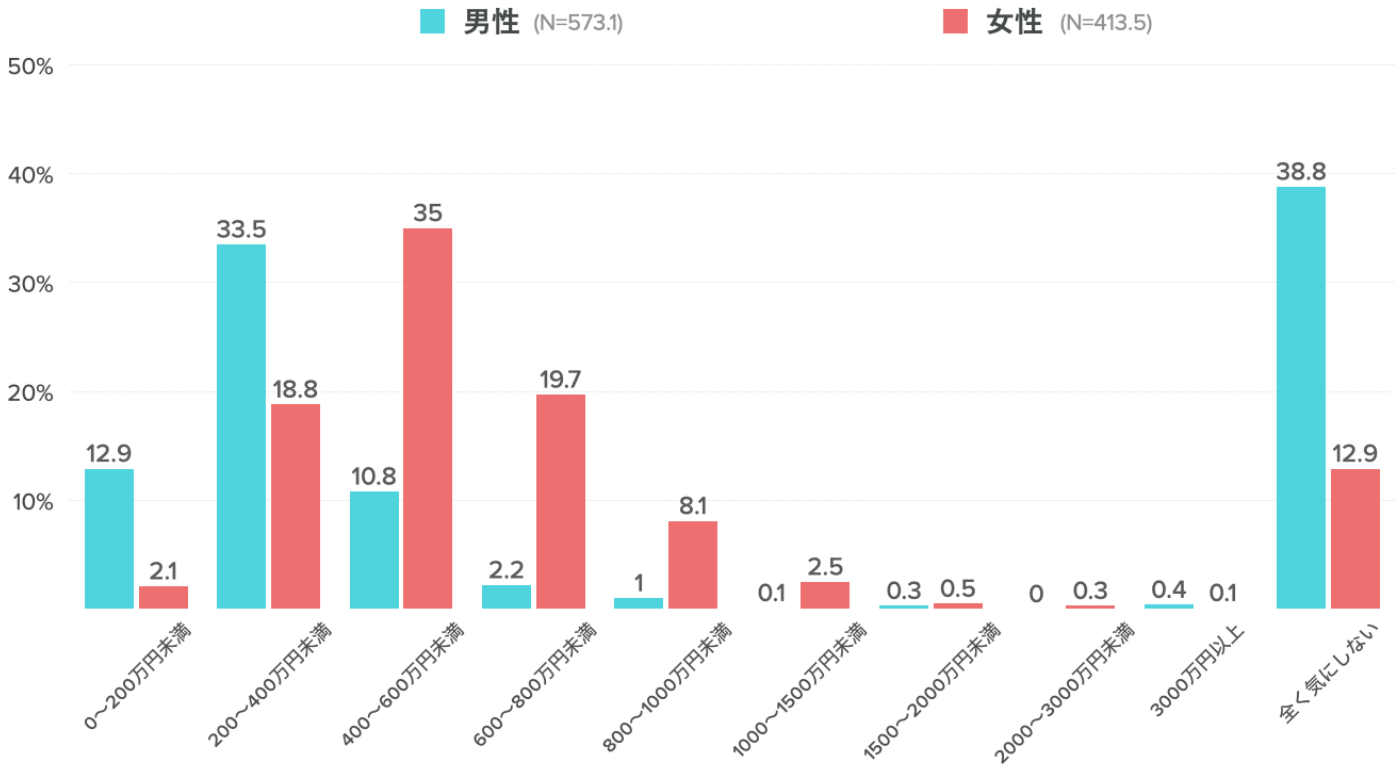


図15. 結婚相手に望む年収（独身者：男女）

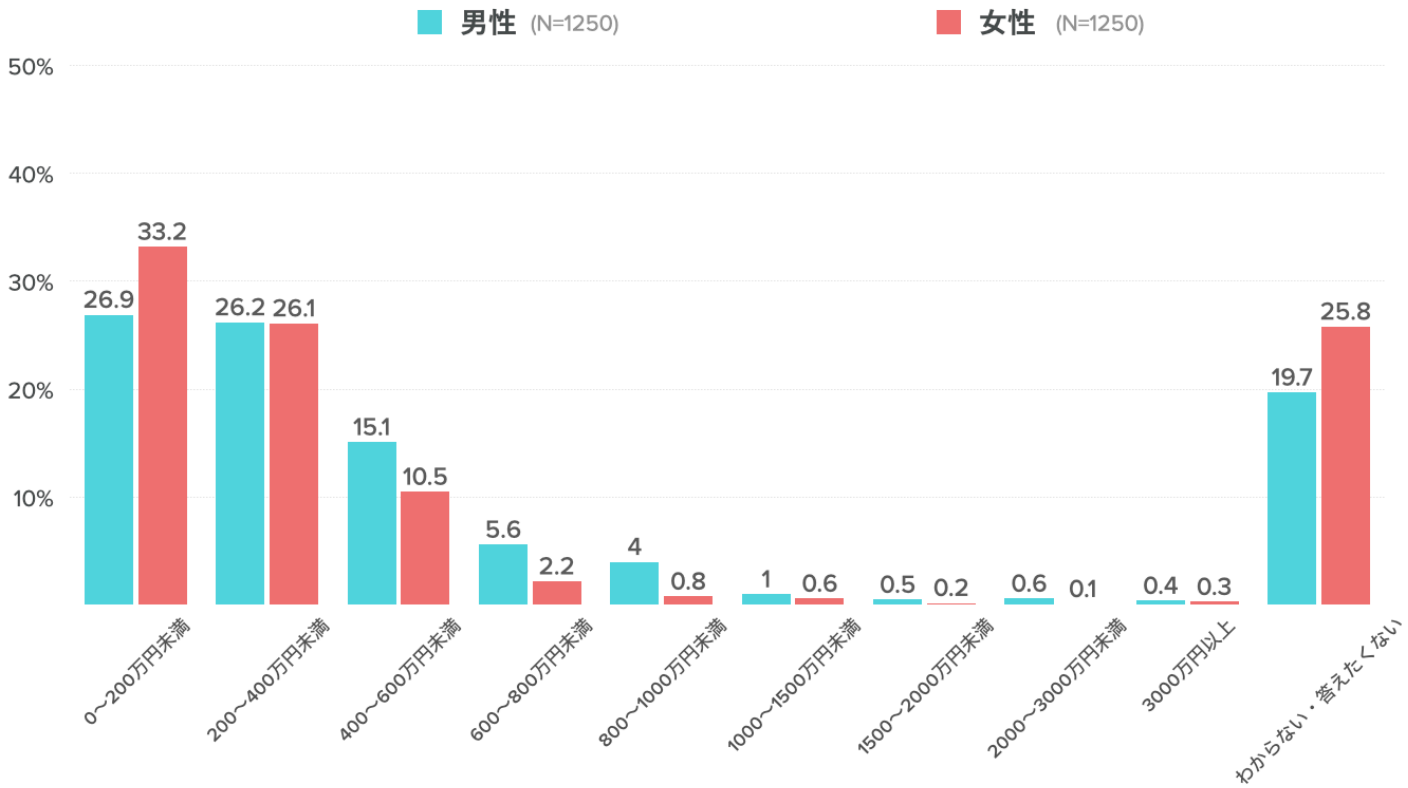


図16. 独身回答者の年収（独身者：男女）

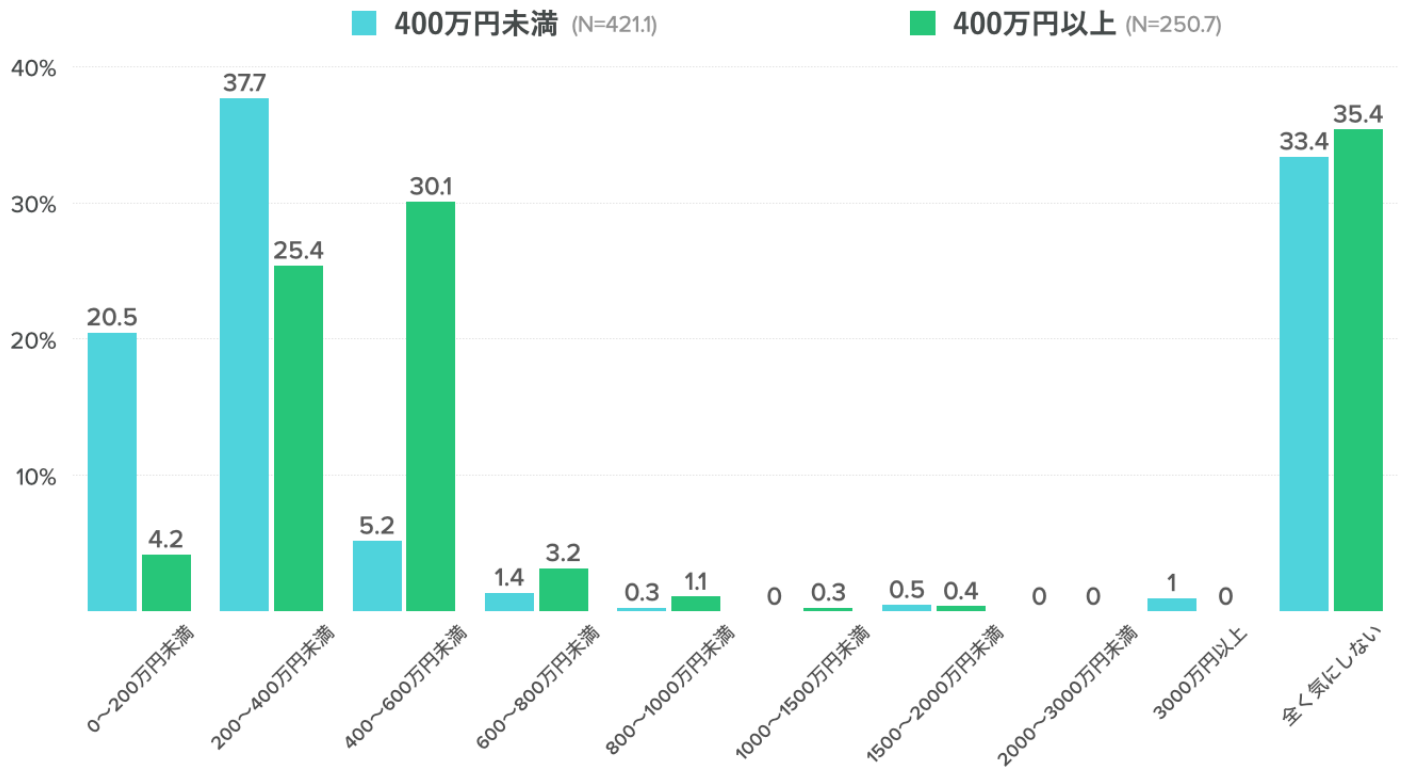


図17. 結婚相手に望む年収<参考値>（独身者男性　年収別）

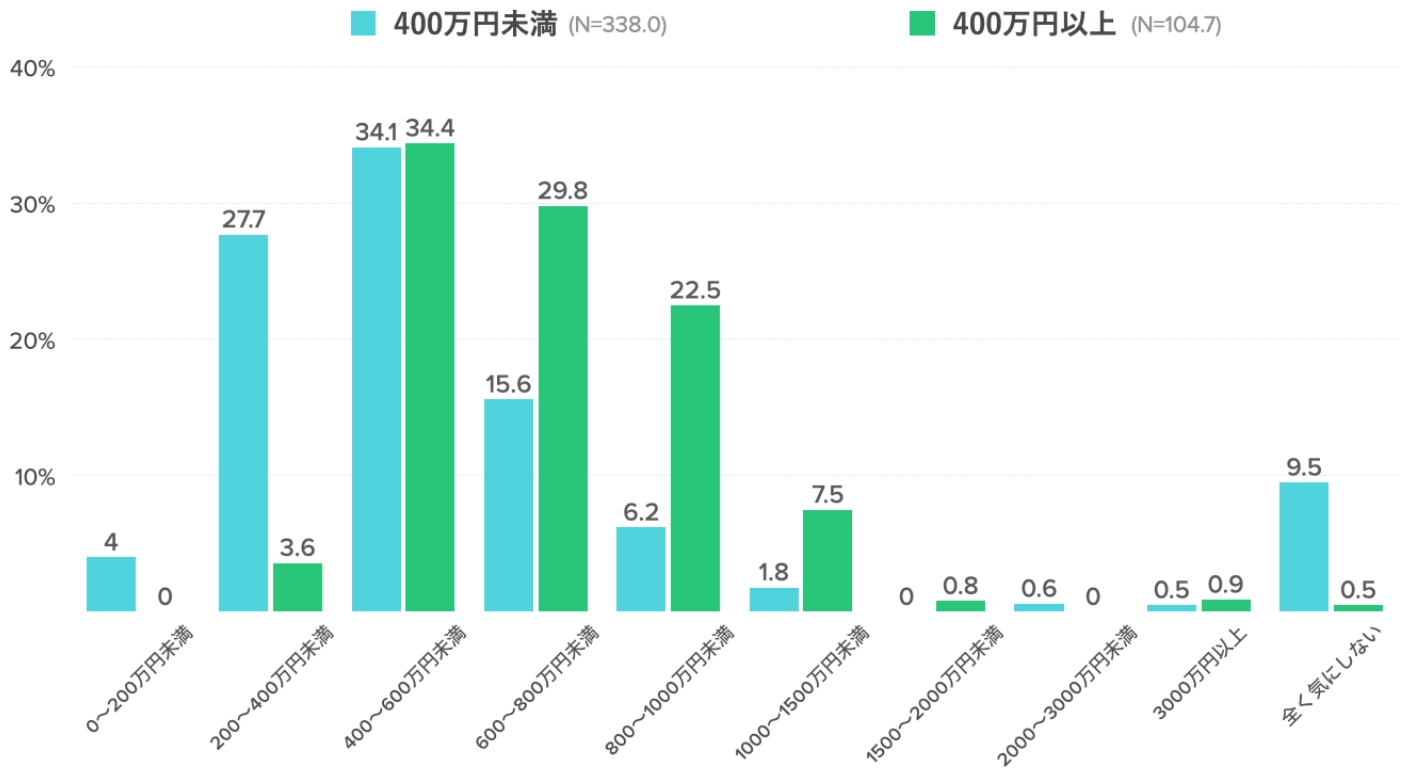


図18. 結婚相手に望む年収<参考値>（独身者女性　年収別）

② 結婚後の「家事」「育児」「仕事」についての独身者の考え方と、既婚者の実態

【家事】【育児】については 20 代 30 代の独身女性の約 6 割が「半分程度はしたい」とイメージしているのに対して（図 19、21）、同年代の既婚女性の実態は「ほとんど自分がしている」が 7 ～ 8 割に達している（図 20、22）。【家事】【育児】とも「主に自分でしたい」と「半分程度はしたい」とイメージしている独身男性は 40 代以上より、20 代 30 代の割合が高く（図 19、21）、「ほとんど自分でしている」と「半分程度はしている」既婚男性は若いほど割合が高い。

【仕事】についても 20 代 30 代の独身女性の 8 割が「働きたい」（フルタイム 35％＋パート・アルバイト 45％）と考えているが（図 23）、同年代の既婚女性の実態は「働いている」が 55％（フルタイム 32％＋パート・アルバイト 23％）にとどまっている（図 24）。

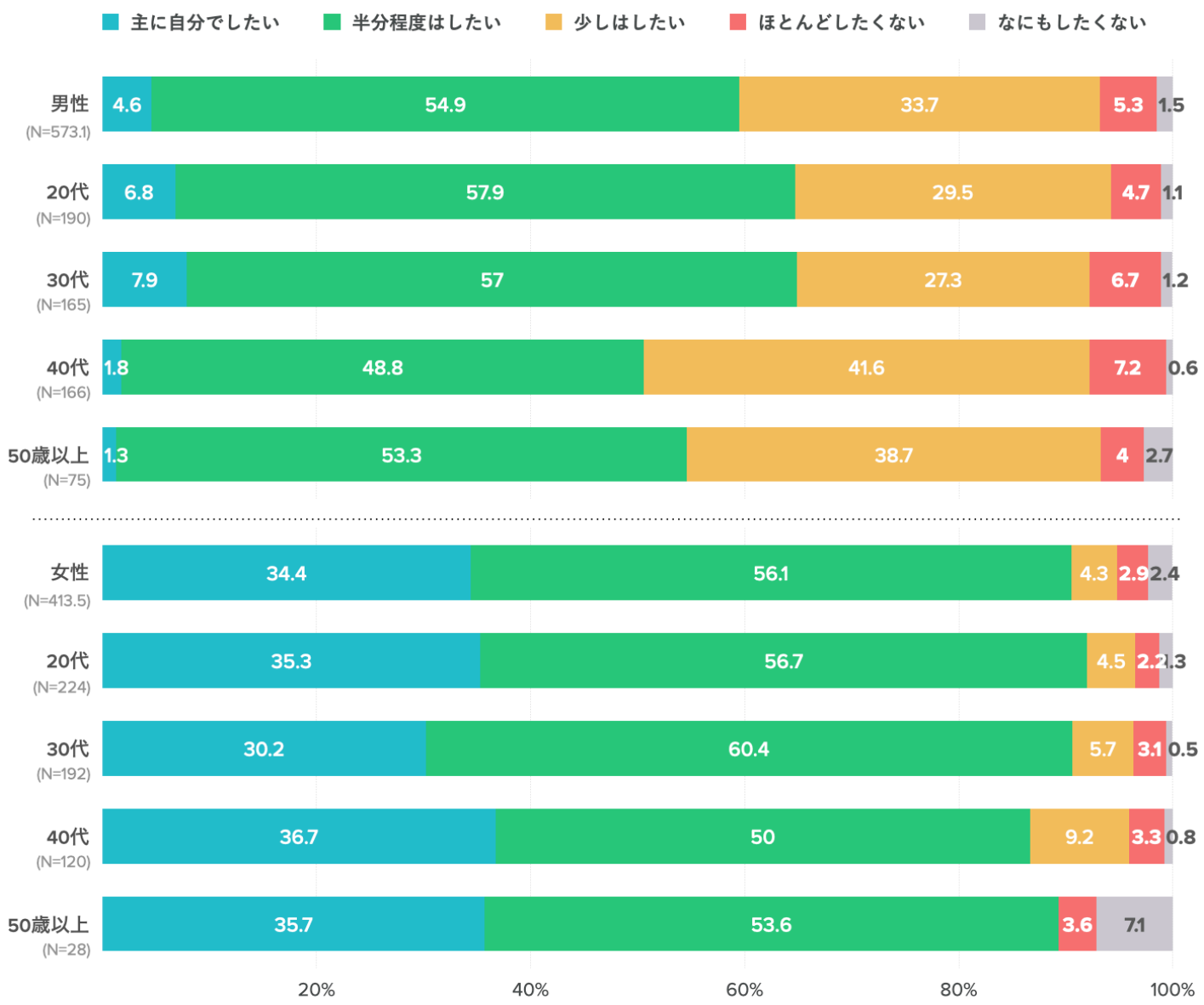


図19. 結婚後の家事について（独身者）

男女とも「半分程度はしたい」（男性 54.9%、女性 56.1%）が半数を超えるが、次いで男性では「少しはしたい」（33.7%）が多いが、女性では「主に自分でしたい」（34.4%）が多い。「主に自分でしたい」と「半分程度はしたい」とイメージしている男性は 40 代以上より、20 代 30 代の割合が高い。

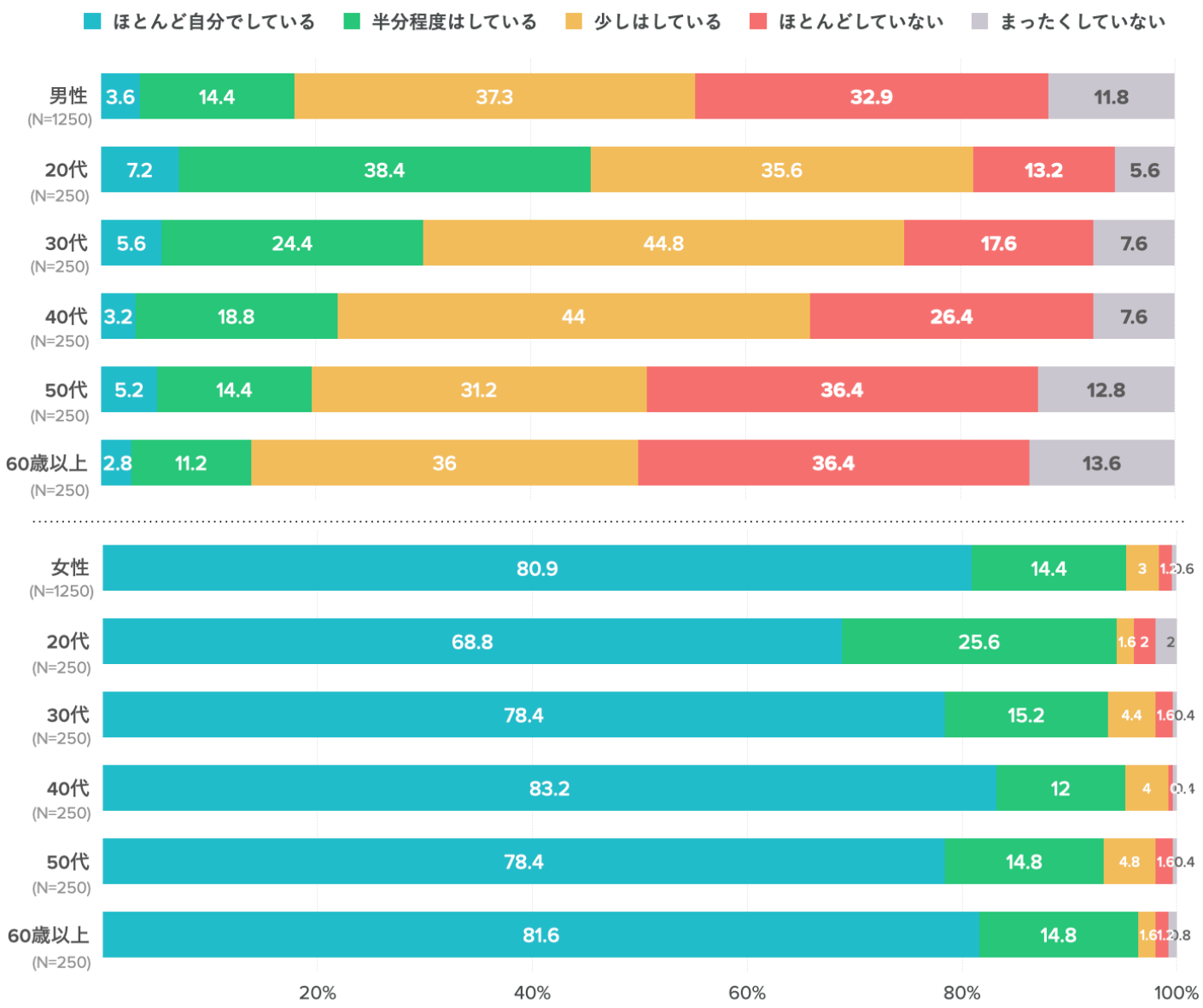


図20. 家事について（既婚者）

男性は家事を“している”（55.2%）のは半数程度だが、女性では「ほとんど自分でしている」（80.9%）が８割を超え、“している”（98.2%）割合は 100%近い。「ほとんど自分でしている」と「半分程度はしている」男性は若いほど割合が高い。

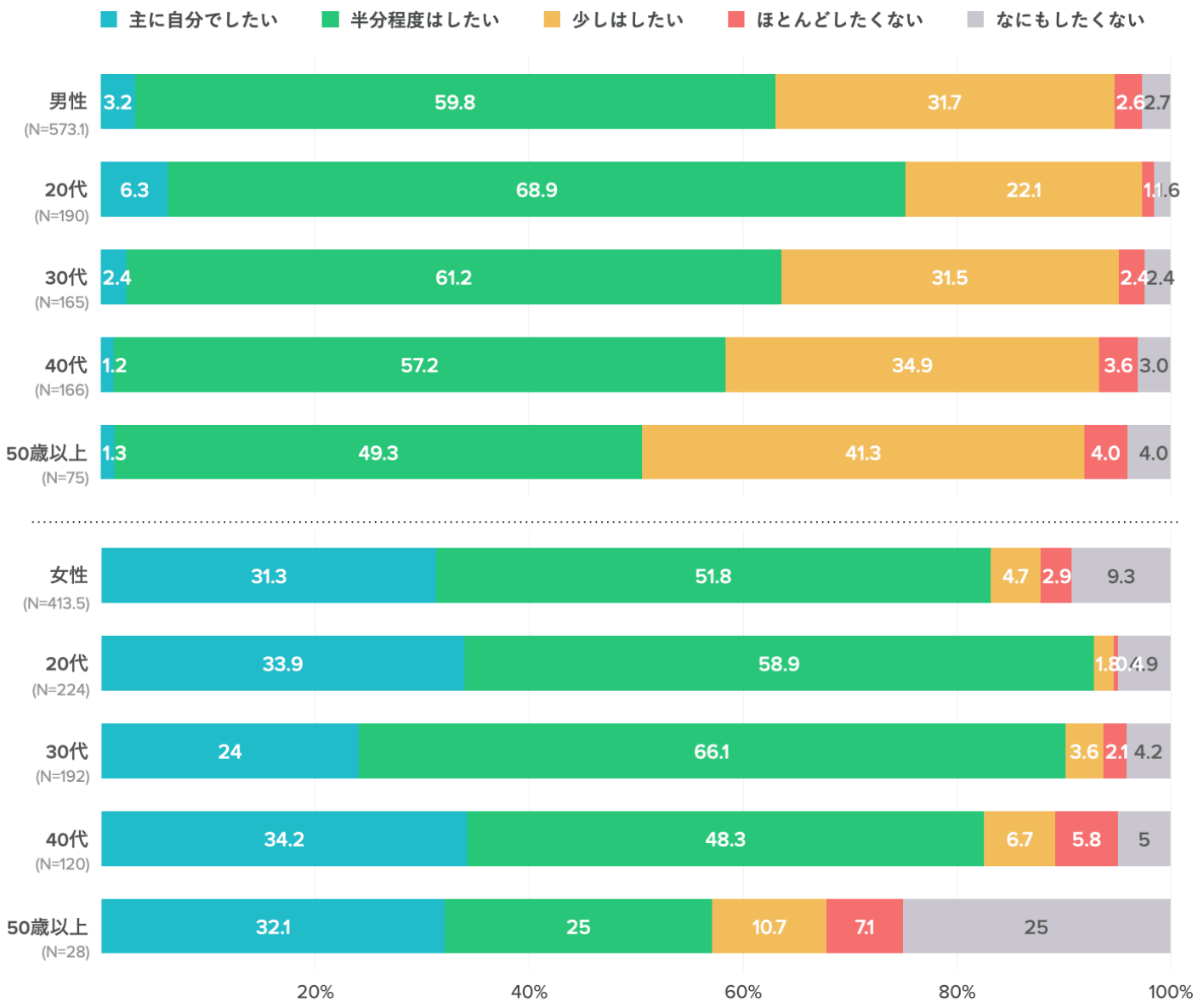


図19. 結婚後の育児について（独身者）

育児については、男女とも「半分程度はしたい」（男性 59.8%、女性 51.8%）が半数を超えるが、次いで男性では「少しはしたい」（31.7%）が多いが、女性では「主に自分でしたい」（31.3%）が多い。「主に自分でしたい」と「半分程度はしたい」とイメージしている男性は若いほど割合が高い。

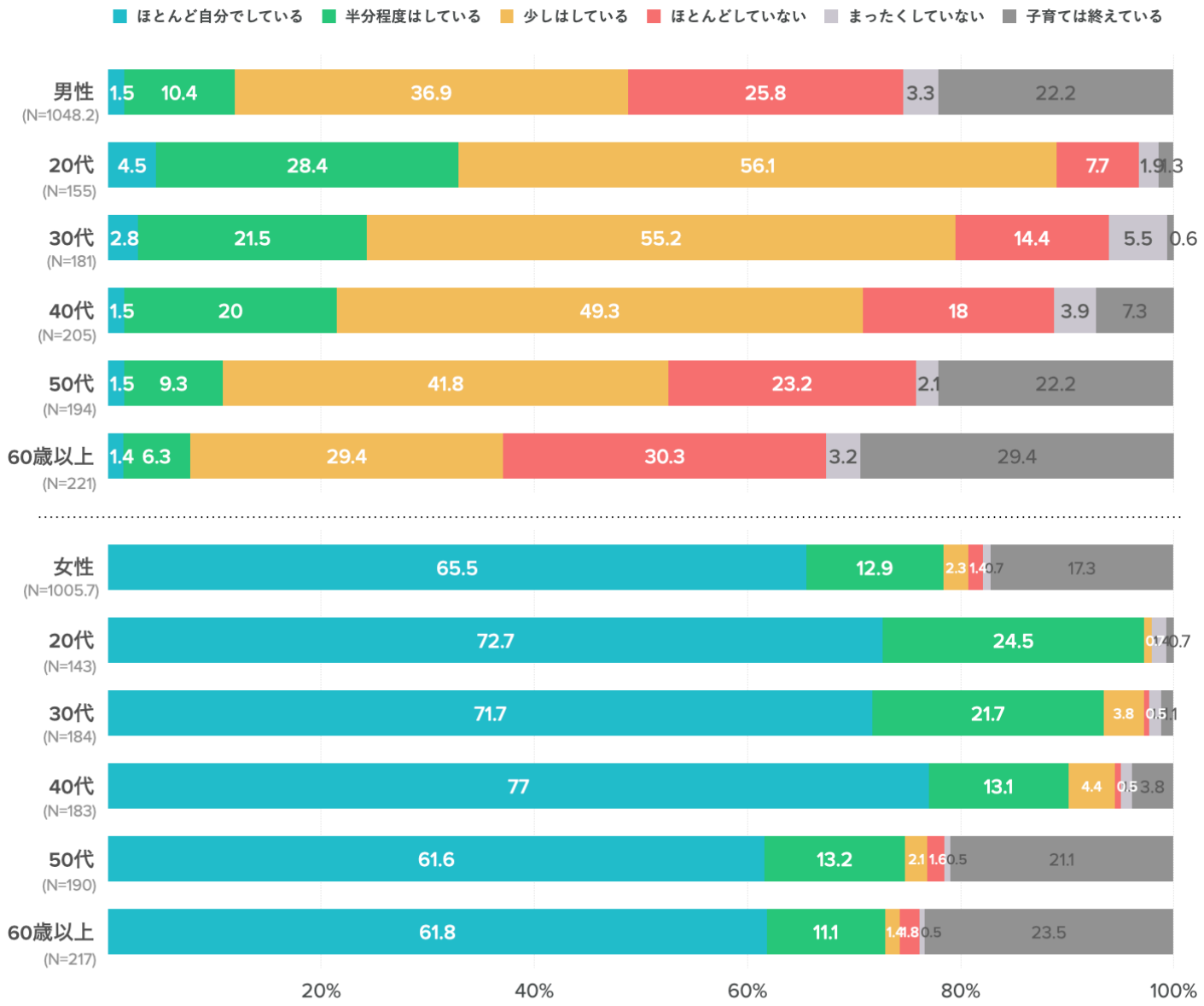


図22. 結婚後の育児について（既婚者）

男性では育児を“している”割合は半数弱（48.8％）なのに対し、女性では「ほとんど自分でしている」（65.5％）が６割台に達しており、“している”（80.6％）は８割を超える。「ほとんど自分でしている」と「半分程度はしている」男性は若いほど割合が高い。

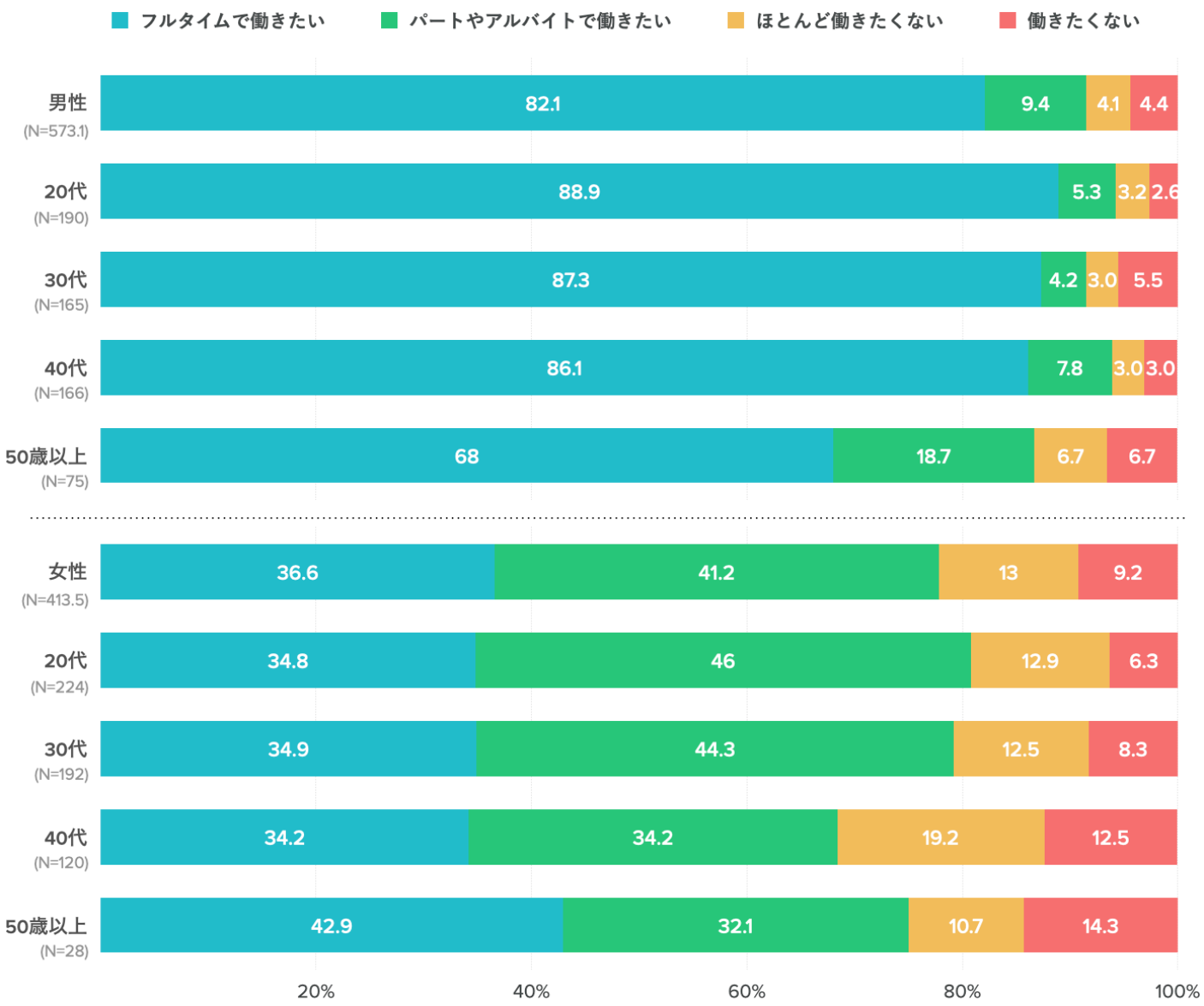


図23. 結婚後の仕事について（独身者）

男性では、「フルタイムで働きたい」（82.1％）が大半を占めるが、女性では「パートやアルバイトで働きたい」（41.2％）が最も多く、次いで「フルタイムで働きたい」（36.8％）が続くが、“働きたくない”も２割強（22.2％）。

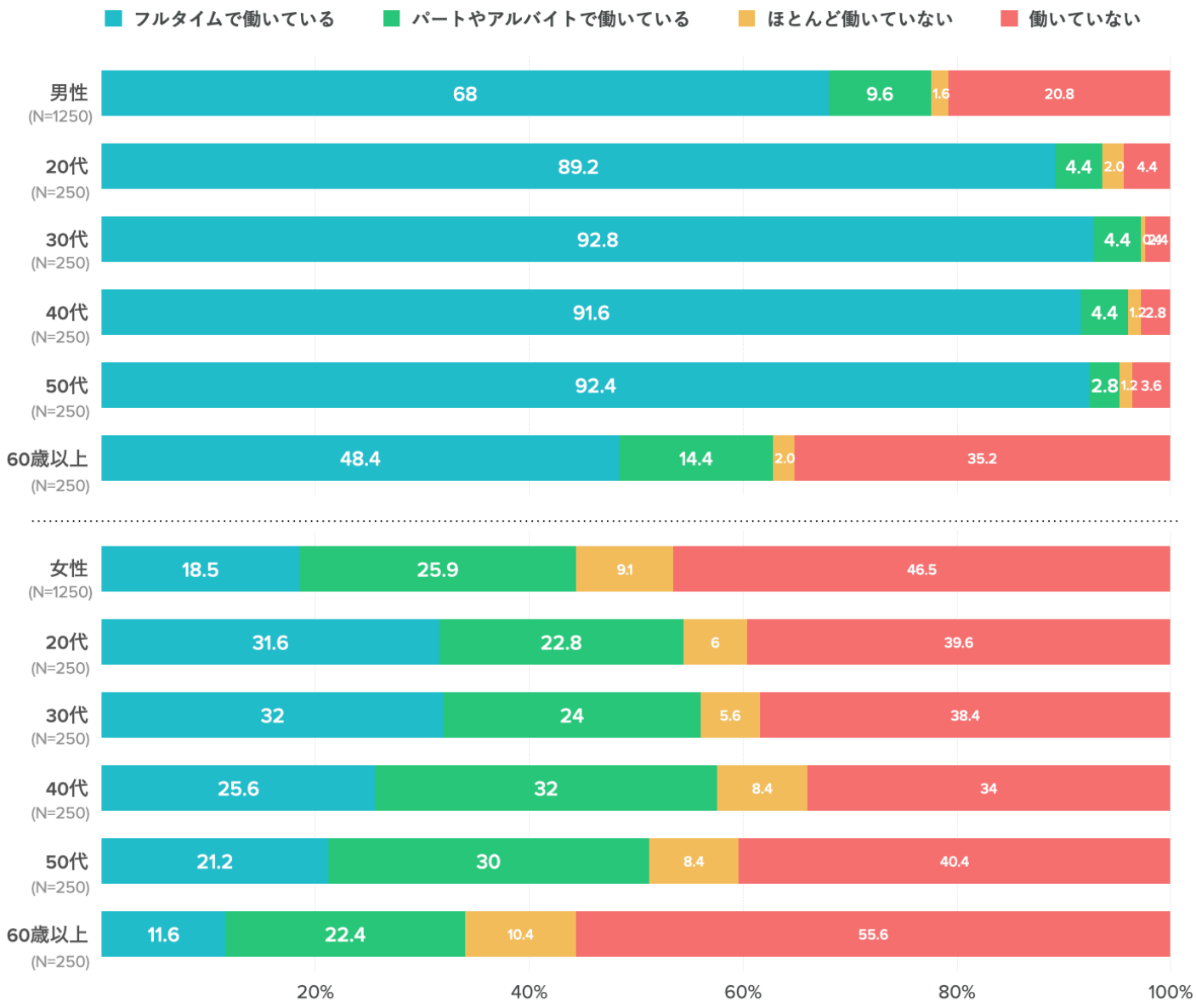


図24. 結婚後の仕事について（既婚者）

男性では“働いている”（77.6%）が 8 割近いが、女性（44.4%）では半数以下。

なお、【家事】【育児】については 20 代 30 代の独身女性の約 6 割が「半分程度はしたい」とイメージしているのに対して、同年代の既婚女性の実態は「ほとんど自分がしている」が 7 ～ 8 割に達している。
20 代 30 代の男性は家事や育児に協力したい（少なくとも半分程度の家事・育児が 60%以上）と言っているものの、なかなか実現できていない。
「仕事」についても 20 代 30 代の独身女性の 8 割が「働きたい」（フルタイム 35%＋パート・アルバイト 45%）と考えているが、同年代の既婚女性の実態は“働いている”が 55%（フルタイム 32%＋パート・アルバイト 23%）にとどまっており、独身者の「意識」と既婚者の「実態」には、まだ大きな乖離がある。

3-2. インタビュー調査の結果

いずれ結婚したいと思う独身男女に対して、結婚相手の年収や仕事、そして交際相手や結婚後の家事や仕事の役割分担意識と実態について尋ねたところ、以下の回答がありました：

（相手の職業に関して）業態は問わないと思うが、たぶん会社の中で普通にお給料を得ていて、同じぐらいかそれ以上得られている旦那さんと結婚して、要は（私と彼で）2 人とも仕事バリバリのご夫婦になっていそうな感じがする。
（31 歳女性、IT コンサルタント）

（相手を見るポイントについて）プライベートよりはちゃんと週 5 日働いているのかなとか、どんな仕事でも良いけどちゃんと仕事をしているのかなとか、やっぱり、その先を考えると、自分も働いていたし、相手もちゃんと働いていないとお互いが生活をする上でどっちかに頼りっぱなしというよりはちゃんと協力したいので、相手はちゃんと仕事をやっているのかなとか、自分の時間は何をやっているのかなとか、そういう部分を気にするようになった。
（35 歳女性、保育士）

僕は家で仕事をすることがけっこう多いので、そういうときに、仕事をしていて、彼女がご飯を作ってくれたらうれしい。もし、相手が仕事が忙しかったら、僕が料理を作る。
（32 歳男性、予備校講師）

結婚して、それでも相手が仕事をしている状況になったら、なるべく家事をやったりとか、相手を気遣えることはしていきたいと思う。
（32 歳男性、システムエンジニア）

コメント

女性が自らの収入に関係なく男性の収入や社会的地位に対するこだわり、執着があり、自分より同じか上であることを求める傾向が未だに強い。その理由として、男女間の賃金格差が減ってきてはいるが、男女とも全体として収入の格差が拡大しつつあるという社会環境に対する不安を覚えることが考えられるほか、周りの目やプレッシャー、当事者自身のプライドや自信のなさなども挙げられる。後者の原因を突き止めると、伝統的な社会意識、とりわけマスメディアや親を始めとした上の世代がもたらす当事者の価値観への影響、そして他人に頼らずに自立していく女性ロールモデルの少なさなどが考えられる。そのため、たとえ高収入女性でも、男性が自分より収入や社会的地位が低いことで世間体を考えたり、いざとなったときに夫だけの収入で暮らせるようにという心理が強い。現在、社会の変化に伴う男女における個人の経済力の変化と、従来と変わっていない性別役割分業が矛盾し、男女ともにプレッシャーがかかっている。それは男女のミスマッチというより、社会の多様化による人々が持つ意識と求める条件のミスマッチと言えるのでは。

男性は家事や育児に協力したいと思っているものの、なかなかそう実現できていない。また今の男性は女性にある程度の年収があってほしいが、多くの人はまだ家事・育児は女性の役割だと思っている。そのような実態や意識の存在には、多くの男性が持つ男女の役割分担に対する考え方が現れている。さらにその原因を突き止めると、伝統的な社会意識による当事者の価値観への影響、そして今まで家事・育児を担う男性ロールモデルの少なさなどが考えられる。女性も、仕事で忙しくても、育児や家事にちゃんと関わりたい、あるいは関わらなければいけないと思っていることが、そのような実態を存在させる原因の一つ。その理由にはマスメディアや上の世代など周りからのプレッシャーもあり、男性から協力を得られないことによる半分の諦めもあるが、女性自身が思う「女性のやるべきこと」の固定概念も大きく作用するのでは。ただし、データからも若い世代の男性は家事や育児に協力的になっていく傾向があることがわかったため、今後を期待したい。

男性上位の結婚事情にせよ、家事育児に関する男性の関わりの少なさにせよ、結婚前後の女性の働くことに対する期待と実態のギャップにせよ、世間で知られるバランスが取れているカップルを含めたロールモデルのイメージが少なく、人々の認識にバイアスがかかっていることが大きい原因。そのバイアスは、従来の社会における男女の地位、マスコミ、親世代などから由来すると考えられ、変えるには社会と当事者、両方の意識変化と努力が必要である。

調査監修：中央大学 山田昌弘教授

４．マッチングアプリが出会いと結婚満足度に与えた影響

マッチングアプリを通して交際相手を見つける活動をしている、あるいは結婚した人は一定数おり、結婚に対する満足度の最も高い既婚者の中にマッチングアプリで知り合った夫婦が一番多かった。

＜背景と前提＞

米国では、既婚カップルの３組に１組がデーティングサービスで出会っているというデータ[9]をスタンフォード大学が 2019 年に出しています。近年、日本でもオンラインデーティング市場が拡大し続けており、オンラインデーティングの上位１０サービスの売上推移は過去５年において増加傾向にある[10]。本調査は、マッチングアプリが日本の恋愛・結婚市場における影響を調べた。

---

[9] Rosenfeld, Michael J., Reuben J. Thomas, and Sonia Hausen. 2019 How Couples Meet and Stay Together 2017 fresh sample https://web.stanford.edu/~mrosenfe/Rosenfeld_et_al_Disintermediating_Friends.pdf

[10] App Annie データとエウレカ自社データによりエウレカが算出

4 - 1 .web アンケート調査の結果

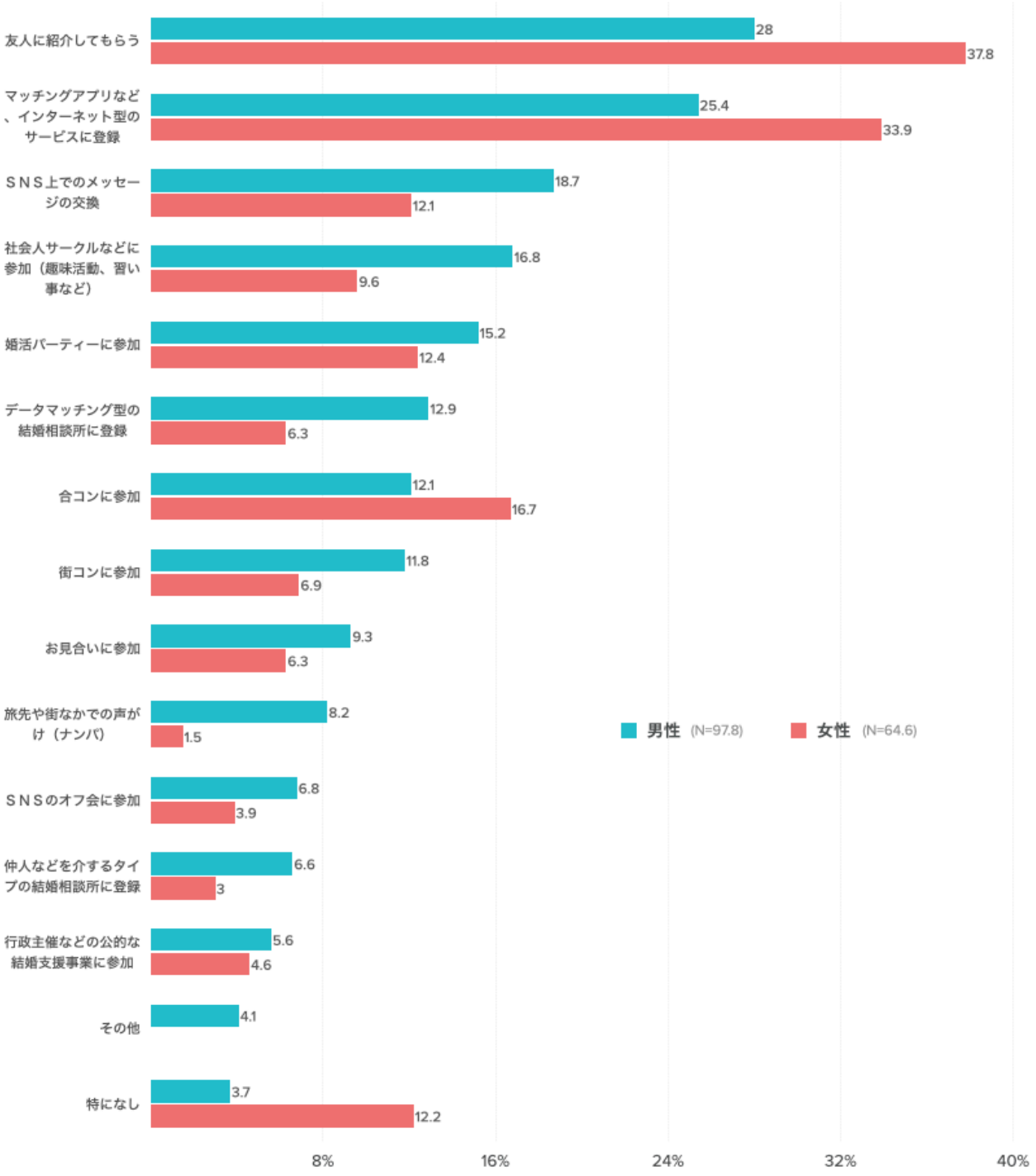


図25. 交際相手を見つけるために具体的にしている活動（独身者）

交際相手を見つけるために具体的にしている活動を調査したところ、友人の紹介に次いで「マッチングアプリを使う」が 2 位となり、特に女性のほうがその傾向が高い割合である。

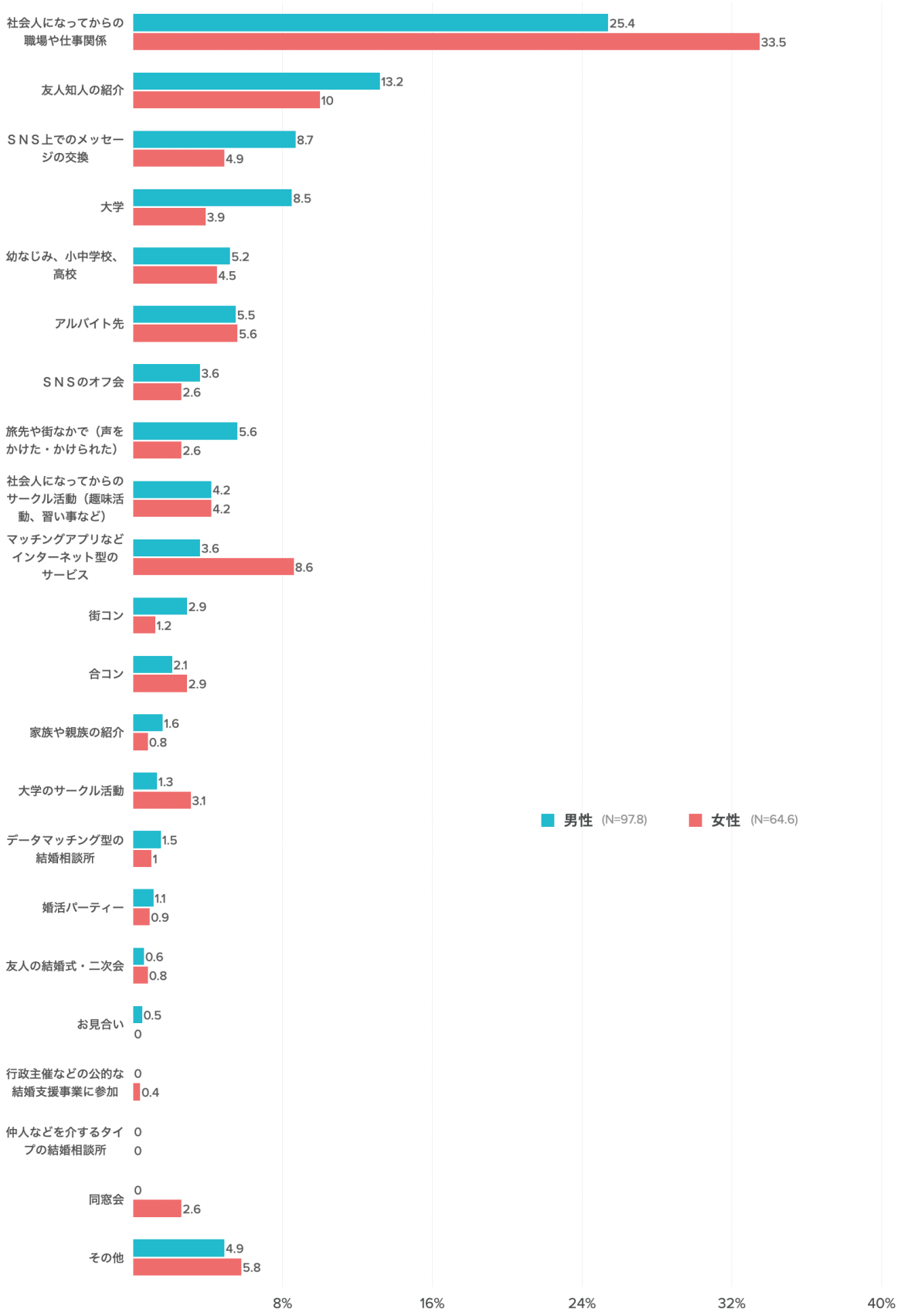


図26. 現在の交際相手と知り合ったきっかけ（独身者）

現在の交際相手と知り合ったきっかけを調査したところ、男女とも「社会人になってからの職場や仕事関係」（男性 25.4％、女性 33.5％）が最も多いが、次いで、「友人知人の紹介」（男性 13.2％、女性 10.0％）に次いで、男性では「ＳＮＳ上でのメッセージの交換」（8.7％）が続くが、女性では「マッチングアプリなど、インターネット型のサービス」（8.6％）が続き、３位となる。

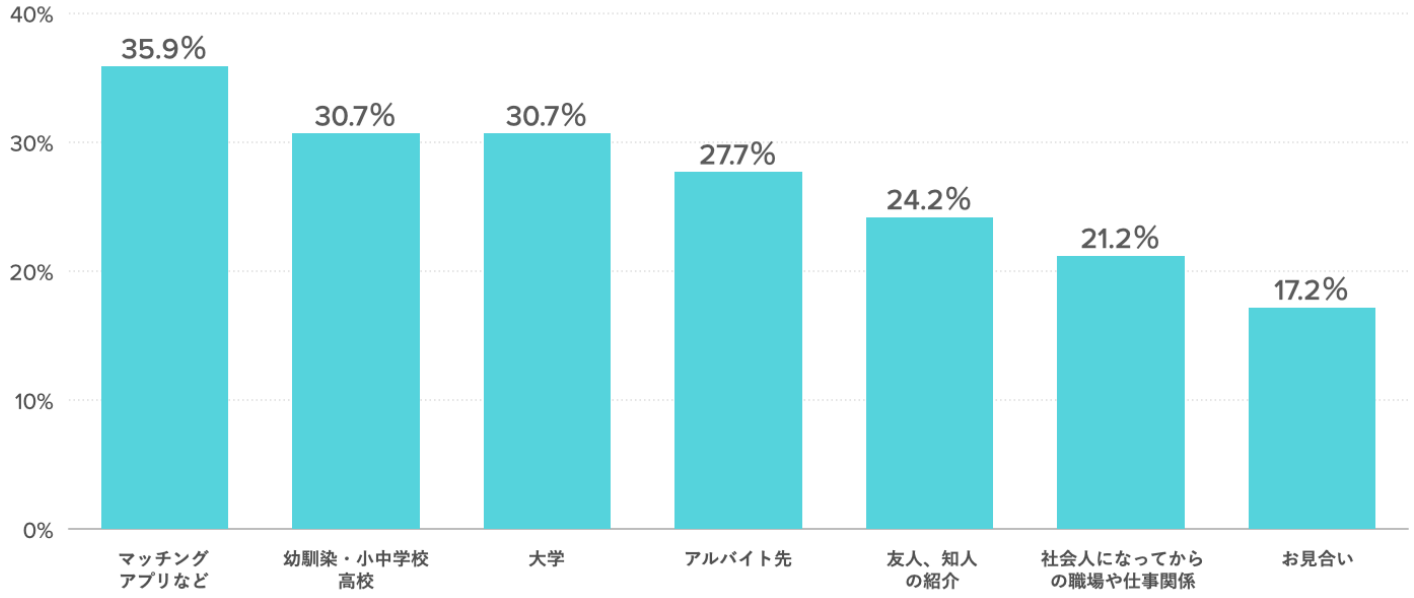


図27. 出会い方別の現在の結婚生活満足度 （非常に満足の場合）（既婚者）

既婚者に結婚生活満足度を伺ったところ、非常に満足している既婚者の中にマッチングアプリで出会った夫婦が最も多かった。

4 - 2 .インタビュー調査の結果

現在交際相手がほしいが交際相手をみつける活動をしていなく、過去にマッチングアプリの利用経験も少ない独身男女に対して、マッチングアプリについての印象を尋ねたところ、以下の回答がありました：

> 女の子が、周りでマッチングアプリを使っている人が多いです。こんなの使う人がいるのかよと思っていたら、みんな普通にやってるみたいです。（中略）マッチングアプリの話を聞く限りでは、趣味とかを書く欄があって、そこでもマッチングするらしいです。例えば、競馬好き、女子とか、ダーツが好きというのだったら、ある意味、効率的かなと思います。実際遊んでみてどう思うかはわからないですが。
> （20 代男性、電話対応）

最近、周りの友達がマッチングアプリはで知り合って彼氏ができたと言いました。彼の話を聞いていると、本当に良い人で全然変な人ではないし、最近の流行りだしアリなのかなと思いますが、良いきっかけになった人もいれば、当日待ち合わせ場所に行って来なかった人もいます。そういう話も何件か聞いているので、そういうところに不信感がちょっとあります。あと、顔を出すのが嫌で、マッチングアプリを登録した友達の画面を見ていたら、普通に知っている人がいっぱい出てきましたので、自分はそれを見られたら、彼女は登録してるよ、しかも、プロフィールこういうこと書いてるよと思われるのが恥ずかしくて嫌です。
（20 代女性、事務）

マッチングアプリをあまりやってみたくないです。理由として、今のアプリとかというよりも、昔の携帯電話の時代に、今ほど出会い系サイトが普通じゃないので、今よりもいかがわしい感じがあったと思うんですが、そういうののイメージがまだ残っているからだと思う。
（32 歳男性、講師）

誰が非難するわけではないんですけど、（マッチングアプリを使うと）すごいガッツイてると思われるのは嫌です。あと自分の年齢的にまだ大丈夫かなと思っていて、30 歳超えて彼氏がいなかったら、それこそ、マッチングアプリをして本気で探さないとと思うんです。話を聞くと、なんとなく（相手を探す手段として）マッチングアプリに馴染みが一番あり、一番手を付けやすくて、一番確率が高いものなのかなと思っています。
（20 代女性、経理）

4 - 3.マッチングアプリ Pairs に関するコメント

本調査とは別に、現在交際相手がほしく、マッチングアプリを通して交際相手をみつける活動をしている Pairs ユーザーが、マッチングアプリの経験やマッチングに対する考え方に対して、以下のコメントを寄せています：

合コン・紹介だと、出会いの幅が職種を含めて限られるし、代わり映えがない。アプリで出会える人は職業もバックグラウンドも様々で、アプリだからこそ出会えるなと思う。いろんな人と出会った方が自分が好きな人を見つけやすいと思う。今の（コロナの）環境下だと、職場で素敵だなと思う人はいても、やはり恋愛に発展させづらいので、そう思うとアプリ経由で外でいろんな人に出会えた方がいい。
（29 歳女性）

マッチングアプリを使うことで、初対面の人とのコミュニケーション力が高まるなど自己成長につながった。あとはとても手軽な点もよい。最初から相手が自分のことを気になっている状態だとわかっているので、誘いやすいし、労力をかけなくても先の関係性にすすめられる。サークルとかだと、遊んで、仲良くなって、良い感じになって、というステップをふまなければいけなくて面倒
（24 歳女性）

コロナ前は飲み屋さんで出会った女性に声をかけたりしていたが、最近はそういった出会いが難しく、（中略）マッチングアプリを始めることになった。それまでにもアプリの存在は知っていたがやっていなかった。（中略）友達からは「使っている」「会える」と言う話を聞いているが、同時に「すっぽかされた」と言う話も聞いているし、信用できないなあと思っていた。始めた当初もそのように感じていたが、Pairs は本人認証があるし、ネットで調べても「信用性が高い」とあったので、ある程度信用できるのかなと思った。使ってみると信頼性への不信は解消されて、むしろ使ってみていいことがたくさんあった。例えばコミュニティ。「お笑いが好き」みたいな大きな粒度から「千鳥が好き」みたいな細かい粒度まであるので、会話のネタになる。合コンなどと違って、コミュニティを通じて相手の好きなことや価値観まで知ってから話しかけられる。コミュニティだけでなく、自己紹介も項目が多くて、一人暮らしか、どんなライフスタイルかまで表現できるので、話のネタが尽きない。相手の求める異性のタイプも知れるし、相手とコミュニティが一致していなかったとしても「興味があることをもっと教えてください」と言う切り口でも話せる。
（21 歳男性）

コメント

マッチングアプリは、相手についてたくさんの情報を得られ、趣味や価値観が合うかどうかを判断できるため、「恋愛はコスパが悪い」「自分に合わない人と出会うリスクがある」という課題を低減させる可能性があり、また、コロナの中では対面での出会いやコミュニケーションの機会が減るという社会環境においては、出会いや交際、結婚に関してリスクなどの側面を消極的に思う独身者のパートナー探しに対しては、今後恋愛・結婚の促進にはマッチングアプリが有効では。

離婚や夫婦仲が悪くなる主たる原因は、「実際に一緒に生活してみてこんな相手だとは思わなかった」というミスマッチである。日本社会では、同棲経験者がほとんどいないので、生活に関する考え方の違いは、結婚してみなければ分からないことが多い。マッチングシステムでは、事前にデータで、相手の価値観や性格などさまざまな要素が聞かなくても分かっているので、結婚後のミスマッチが起きにくいのではないか。

ただし、実際に調査の中でも声が上がっているように、マッチングアプリに対して消極的な態度や不信な声を持つ人はまだ一定数おり、独身者の親世代を含めた上の世代がマッチングアプリでの出会いを受け入れられないことも結婚相手を探す若者たちにとっての懸念になっているようである。これからマッチングアプリを活用した恋愛・結婚の促進を実現するには、マッチングアプリを運営する業界全体として安全な環境を提供して、その不安を解消に向けた努力が必要であり、少子化対策、結婚支援の取り組みのなかで、行政機関もその環境整備に役割を果たすべきである。

調査監修：中央大学 山田昌弘教授

考察

政府は出会いの場の提供にフォーカスしており、最新の少子化大綱では、男女共に仕事と子育てを両立できる環境の整備や結婚を希望する人を応援する社会的機運の醸成を掲げる。交際・結婚活動において何かの理由で交際や結婚に踏み出せない当事者が多くおり、当事者に寄り添って、彼らの意識をもっと探り、精神的な不安払拭を十分重視した、政策上の支援と対策が必要なのでは。

今回の調査において、男女とも従来の家庭構造でありがちな「男性稼ぎ手モデル」に影響を受け、女性の社会進出に関係なくその考え方を持つ人がまだ多いことがデータで見えた。調査の中ででもコメントしたが、それは男女のミスマッチというより、社会の多様化による人々が持つ意識と求める条件のミスマッチと言えると思う。時代が変化する中、今後の社会においては、多様性のある夫婦や家族のあり方を当事者に示していくことが重要であり、マスコミの宣伝や教育を通して、ロールモデルの創出を含めた、交際・結婚における男女の役割に対する価値観形成への関与に、政府や社会レベルのサポートが求められるのでは。

最後にトピックスとして出たマッチングアプリは、1980 年代まで主流であった職場や学校など身近で自然な出会いに代わる新しい出会いの方法がないなかで登場したと見られる。マッチングアプリは、労働力の流動や働き方の多様化など、社会環境が変化した中、自然な出会いが当たり前ではなくなる時代にいる人々の、出会いを求めるニーズに応えているものと考えられる。近年では普及されつつあるが、過去の情報や根強い偏見によってマッチングアプリに抵抗感を持つ上の世代は、当事者のマッチングアプリの利用にマイナスな影響を与えることもあるのでは。マッチングアプリの普及による恋愛・結婚の促進を実現するために、当事者が安心してマッチングアプリを利用する環境整備が必要であり、そのために新興産業であるオンラインデーティング業界はもっと市民権が与えられるべきでは。

調査監修：中央大学 山田昌弘教授

調査結果を受けて

日本やアジアではオンラインデーティング文化はまだ欧米ほど広がっていないが、出会いのチャンスが広がれば、より多くの人が、かけがえのないパートナーと出会うことができるはずである。エウレカはかけがえのない相手との出会いを創出することをビジョンとしており、ひとりでも多くの人が、自分の望む人生を手に入れることができる社会をつくっていきたいと考えている。日本社会には、恋愛・結婚を希望しているが「適当な相手と出会えない」人が多くおり、その状況は結果的に、少子化の大きな要因である未婚化にも影響していると認識している。エウレカは、マッチングアプリ Pairs の運営など自社のサービスを通して多様な出会いの実現に注力し、民間企業ならではの立場から、「出会う」機会を増やすことによって交際や結婚を促進し、未婚化をめぐる様々な社会課題の解決に役立つことを目指している。今回の調査は、山田教授の知恵を拝借し、恋愛・結婚に関する当事者の意識に焦点を当てて、彼らの恋愛・結婚に踏み込むための障害となるような要素を特定し、取り除くための試みである。調査の結果を踏まえ、恋愛・結婚に関する当事者の意識をより深く理解した上、マッチングアプリが恋愛・結婚の促進には有効であることも確信した。今後も恋愛・結婚に関する社会課題と当事者への理解を深め、現状改善のヒントを生み出すよう研究を継続し、またマッチングアプリがもたらす未婚化への解消効果を最大化し、より幅広く有識者や関係者とともに恋愛・結婚しやすい環境の実現を図っていく所存である。

株式会社エウレカ